



# 阿修羅の言葉



小林 道憲

阿修羅の言葉

小林道憲

## 阿修羅とは

真理と非真理の狭間に立つ者、それが阿修羅である。

阿修羅は苦悩する。しかし、阿修羅は語る。

阿修羅は、非真理を拒絶し、真理の不可能を言う。

真理の重荷を背負うもの。それが、阿修羅である。

真理について語ることは、それは、阿修羅にとつてすでに重荷である。非真理の潜勢力があまりにも巨大だからである。

真理があまりにも孤独であることを、阿修羅は嘆く。今日では、真理はあまりにも孤絶しすぎている。

真理の世界へも帰れない。非真理の世界にも住しえない。真理と非真理の世界の境界で、私の精神は分断される。

阿修羅は真理と非真理の両方から押し潰される。しかし、阿修羅は耐える。

真理の世界に向かつては、それがもう現代では不可能なのだということを、私は宣言せざるをえない。それが可能だと信じている者には、その怠慢を指摘せざるをえない。真理の世界に安住している真理の淫売達。幸福な真理信奉者達。何という認識不足。かつて真理であったものは、現代では、もう足元から破壊されてしまっているのに。真理に対しては、その不可能になったことへの嘆きと重荷。非真理に対しては絶対的拒否。真理と非真理の間に立って、私の魂は砕かれる。

真理は、私に、真理の言葉を語ることを禁じたかのようにみえる。それほど、真理は傷つき、沈黙しようとしているのだろうか。この非真理の世界に自己自身をあらわにすること、真理は恐れているように思える。だから、真理は、この崩壊した世界に生きている私に、真理の言葉を語りことさえ禁じたのだ。真理の世界からの禁止命令。言っても無駄。一種の失語症。

我かつて見しまことの智慧語るときあらんや。

私は、この非真理の時代にあつて、それでも、かつて真理であつたものを我身一つに背負つて、それに殉じようとした。しかし、もう、そのことさえ、現代は不可能にしている。

私は、非真理に対して否と言う。だが、同時に、私は、真理に対しても否と言わざるをえない。真理もまた不可能だからだ。

真理からも、非真理からも疎んじられ、追放される者。それが、阿修羅である。阿修羅は、神からも、大衆からも、憎まれる。

真理と非真理の間に立つて、それでも、私は非真理を考察し、真理を叙述してきた。そして、なお、真理と非真理の間に立ち尽くしている。

春だけではない。修羅が頭をもたげてくる。春は修羅を呼ぶ

興福寺の阿修羅像。仏と衆生の間立つ者。少年の無垢。無垢ゆえの嘆き。世の衆生への憤りと悲しみ。そして、仏への抗議。憤りと悲しみに耐える者。

阿修羅は、悟りきれぬ者、救われきれないぬ者である。だが、阿修羅は、仏よりもよく仏

を知り、衆生よりもよく衆生を知る。

真理と非真理の切り結ぶところ。そこから生れる思想。それを、阿修羅は語る。

現代。非真理が真理の仮面をかぶって登場している時代。

真理と非真理。世界と非世界。現代、精神なき世界。そして、大地。

病める魂を癒すものは、わずかに、病める魂の言葉のみ。

### 哲学と思想について

どんなに貧しくてもよい。自分で考えたことを、自分の言葉で表現しなければならない。

おびただしい文献以前に、事柄そのものが探求を要求している。多くの文献の介在は、むしろ、私にとっては邪魔である。

いかに貧しくとも、自分の目で事柄そのものへと親入し、そこからおのずと現われてくるものを、そのままに叙述すること。すべての伝統的先入観を捨て去るとき、事柄はそれ自身のペールを脱ぎ、事柄そのものが自らを語る。

私に残された唯一の道。単なる哲学史研究を捨てること。ただ、事柄そのものに身を任せ、事柄そのものの語るに任せる。伝統の重荷を下ろすがよい。

私は、事柄そのものを探求したい。

デカルトもカントも、フッサールもハイデッガーもいらぬ。現象そのものへ。事柄そのものへ。

自分で考えろ。人の頭で考えるな。

現代の膨大な知識大系を一旦捨て去ること。そして、哲学の歴史をはじめ、長くなりすぎた歴史的知識大系を忘却すること。要するに、本来の無知に帰ること。

あらゆる事象を、その消滅点から見ること。そうすれば、物事の本質が見えてくる。

事柄そのものから出発しなければならない。そして、根源的無知に帰らねばならない。それが、本来の思惟である。人は、一生に一度は、一旦、あらゆる知識をかなぐり捨てて、事柄そのものありのままの姿を見なければならない。かなぐり捨ててべき知識、そこには、今までの哲学者や科学者の見識も含まれる。

私は、アリストテレスやヘーゲルから学ぶより、何よりも、事柄そのものから学びたい。

哲学はいつも自己否定性を見る。哲学はいつも問いから始まる。哲学はいつも無知から始まる。

私は、人をあつと言わせる仮説を立てるでもない。独断するでもない。気の効いた言説を言うのではない。人の言つて欲しそうなイデオロギーを語るでもない。私は、ものごとの本質を見たい。

哲学とは否定の場で思惟することである。

ドグマを立てること、それが哲学の目標になつてはいけない。哲学は、何より臆見の吟味であり、現象の考察であり、本質の直感である。

どうにもならない循環や矛盾のまわりを、いつまでも飽きもせず堂々巡りをしているのが哲学である。

現代においても一度新しく哲学を始めねばならないと言われるとき、哲学は終わっている。何事も、それがダメになったとき、いつも、もう一度と言われる。

いつの時代でも、哲学することは可能である。しかし、それが時代的意味をもつことは、もはやないかもしれない。哲学の終わり。俗流哲学は別として。

多くの会議が催される。言葉が行きかう。しかし、そこからは、なにひとつ独創的な思想は生み出されないであろう。独創的思想は時代の片隅から、社交の局外から生み出される。しかも、それは、少数の例外者が自らの身心を犠牲にして生み出すものである。

哲学とか思想は、大衆が言つて欲しそうなことを言うことではない。

大概の人々にとって、思想というものは単なるカセットにすぎない。彼らにとって、思想は取替え可能であり、価値あるものではない。だから、彼らがどんなに立派なことを言つていても、それを真に受けてはいけない。明日は何を言い出すか分からないのだから。

古いワインは、新しいボトルに詰め替えて売らねばならない。そこに、独創がある。

思索は孤独である。どうして、対話や討議などで真理が見出しえようか。

古来の偉大な精神はしばしば弾圧に遭っている。そのとき、彼らは命をかけた。弾圧というもののない今日の民主主義社会では、命をかけるほどの価値のある思想は生まれえない。

世俗の様々な葛藤からも、真理を見出さねばならない。

一種の流行哲学。ポストモダン風の思想。気の効いた批評が、この混沌たる時代の流れの中でもはやされる。しかし、彼らはただ時代の波に乗っているだけなのだ。この文明の軽やかな気分に乗って、自分は安全地帯にいて、ちよつとシャレたことを言っているにすぎない。世間はこれをもちあげるが、所詮、これも滅ぶ。時代とともに。

ニーチェを引用すれば、人は納得するが、引用せずに、ニーチェと同じことを言えば、人は腹を立てる。

全体への責任、時代への責任をもった哲学者がいなくなったということ。プラトン以来、哲学は、全体への責任、時代への責任から思惟するものであった。

専門化の野蛮性にも、道化の野蛮性にも陥らずに、私は、私の思想を展開したい。

哲学研究者、彼らは、微に入り細に渡り文献を細かく調べ、重箱の隅をつつくように研究する。しかし、そうすればするほど獨創性を犠牲にしていることを忘れていく。もつとも、もともと獨創性のない連中がそういう仕事をするのだが、かくて、ますます、哲学は哲学することから遠ざかる。

哲学とは、普遍的な言葉を借りた自叙伝である。

ひとりの思想家の思想が一時代の終わり、または、後の時代の発端とみるのは誤り。思想そのものは、その時点でいつも永遠に通じている。

人間にとって、思想とは願望である。願望を満たすものは理解するが、そうでないものは理解しない。思想は体験であり、感覚であり、直感だからである。あるいは、その概念化にすぎないからである。

今日の哲学者を見るに、彼らは、実に雄弁に、まるで立て板に水を流すように、各哲学者の学説を見事に解説してみせる。しかし、事柄の根本のところを尋ねてみると、なにか一つ使いものにならない。

今日の哲学者は何かにつけ群居して、あれこれ議論している。また、評論家的思想家はことさらに新奇を追い、何かと気の利いたことを言う。しかし、すべて、だめ。

旧来の知見に執着してはならない。しかし、新奇な知見を追いかけていてもならない。

今や、真の哲学者に遇うことはない。ただ、人の言葉を拾い集めて詮索するやからのみ。

思想とは、時代の必要とするイデオロギーを作り出すことではない。決して。

哲学者は、諸文献から得た文句をあれこれ吟味することに時間を費し、東西の哲学者の言葉を自己の知見とする。だから、彼らに一間を発してみると、相も変らず他人の言葉のみ。

東西の哲学者の引用や解説で満たされた論文は数多い。しかし、事柄そのものについて自分はどう考えるかを述べなくては、哲学にはならない。

対立項の一方のみを主張すること。それは、それだけで虚偽である。真実は、対立項の重ね合わせの中にある。

物事の単純化、これほど野蛮な思考はない。

Disposition(気分)という。気分は置かれた位置や場所に深く関係する。

## 存在について

形あるものは滅びる。

生成は存在に先だつ。

一輪の百合の花は、私が沈黙するとき、はじめて、その全体を、そのままにあらわにする。

思惟でもって存在を把握するのではなく、存在を存在者のもとに返すこと。そのとき、思惟も思惟の自己を得るであろう。同時に、思惟も存在も、その同一の根源に立ち帰るであろう。

現実とは、現じて実となることである。現実とは、それ自身生成するものである。決して静止したものではない。現実とは、実現される働きである。

事柄には表裏二面あり、重ね合わされて一つになっている。ところが、相対的場では、それぞれ表裏別々に主張される。そのため、ものごとは、賛成と反対といつも二通りにわかる。本当は、対立者の一致こそ真実はある。

すべては関係である。関係において、意味が生じる。

どの集合も、その背景に空集合を前提している。だから、そこにおける演算または推理の公理体系は、それ自身を否定するものを自己のうちにすでに含んでいる。ひとつの集合は自己否定的である。存在は無を含み、生成してやまないからである。

ドーナツの穴がなければ、ドーナツはできない。

相反するものはまた相補的である。しかも、相反と相補が相反するとともに、相補的である。この論理は無限に続く。しかし、これをヘーゲルのように悪無限とのみ言って片付けおけるものではない。宇宙、物質、生命、社会、すべてが歴史的・形成的であるのは、この悪無限による。

生成するものは、消滅しなければならぬ。

真理はもともと過去形だった。あることはあったことである。

「あるものはある。あらぬものはあらぬ。あるものがあらぬものになったり、あらぬものがあるものになったりはしない」と、バルメニデスは言った。そう言ったバルメニデスは、すぐにあらぬものになった。生成のみがある。

個性性、この不思議なもの。

存在は、私にとってなお不思議である。

私は、矛盾に対しては、なんら苦痛を感じない。もともと、矛盾が事実なのだから。それは、真理の二相を表現している。私は、むしろ、論理的に一貫しすぎているもの、機械のように統制の取れたもの、既製服のように決められたもの、スローガン、ものごとの一方のみを主張するもの、独断、決めつけ。それに苦痛を感じる。

真理は段階的に捉えられるものではない。世界の諸領域は、それぞれの地点で全体的真理を写している。部分は全体を写す。しかも、部分と部分も相互に射映する。だから、ヘーゲルの体系、真理の段階的把握は崩壊する。体系の崩壊は、かえって真理を明らかにする。

今まさに打ち出されようとする音、今まさに消えようとする音の最後の余韻。その瞬間の緊張。無から有へ、有から無へ。有と無の境界。

世界は本来一であるが、多として現われる。世界は多対多の戦いである。そして、それは、いつも一を予想している。一を求めて、多が争う。世界は、また、一と多の戦いでもある。だから、世界は生成する。

私と他者との間には、絶対に理解することのできない断絶がある。

仮想が現実であり、現実が仮想である。バーチャルがリアリティであり、リアリティがバーチャルである。すべては、夢まぼろしのごとく、幻想である。しかし、幻想こそ実在である。そうでなければ、社会もなければ、貨幣もない。物さえないであろう。

何事にも、表もあり裏もあり、天地もあり左右もある。前後もあれば上下もあり、東西もあれば、南北もある。善悪、美醜一切が、同じ一つのものに含まれている。

ペールに包まれていてのみ、秘密は、はじめて秘密である。

死への存在の自覚に現われる人間存在の根底。それは、時間の地平から開かれるばかりでなく、空間の地平からも開かれる。宇宙空間の永遠の沈黙。それは、人間存在の無根拠を浮き立たせる。

哲学はヤマタノオロチのようなものだ。存在という胴体の上に、神だの、イデアだの、ヌーメスだの、一者だの、道徳的立法者だの、絶対我だの、絶対精神だのと、いくつもの頭をつけて歩いている。誰も、しつぽの先を見ない。ヤマタノオロチが立っている大地を見ない。

古代ギリシア以来、西洋の哲学は、《存在》の本質を、どこまでも飽きもせず、忍耐強く、執念深く追究してきた。しかし、存在の本質は空である。

西洋の哲学は有の哲学である。

色即是空から空即是色へ。空即是色から色即是空へ。私の思想の変化。

すべては現象である。

事実はそのに現われ出ている。あるがままに現われ出ている。

共生ではなく、相成。相互作用からの自己形成。

Aの批判はAに依存する。Aがそれによって滅べば、Aの批判も滅ぶ。

大概の宗教や哲学の創始者の思想には、矛盾した二面の要素が融合されている。しかし、それが、その弟子筋になると二分され、分裂していく。真理は、一から二へ、いつも分かれていく。対立した二派の中間に真理はある。

生きとし生けるものは、水が氷を結ぶように生まれ、氷が融けて水になるように消える。

## 自然と宇宙について

文明が滅んでも、人類は滅ばない。人類が滅んでも、自然は滅ばない。自然が滅んでも、地球は滅ばない。地球が滅んでも、宇宙は滅ばない。宇宙が滅んでも、宇宙は再生して行く。

人事と自然の微細の中に宿る宇宙の力を感得したいと、私は思う。

宇宙の創造、生成のままに帰るといふことの必要。存続は、必ずしも価値ではない。

銀河も、星も、地球も、岩石も、業によってなりたつ。煩惱に悩んでいる。

宇宙飛行士は、宇宙に飛んではじめて、人間の卑小さを知る。宗教や哲学は、最初から、その自覚から出発している。

生命は苦悩である。それは努力だから。

輪廻転生の思想。それは、さしあたり業苦の連続性を意味する。しかし、生命の連続性、いのちのつながりを語っているとも言える。

本能は生命の存続意志である。それは宇宙の意志に通じている。

生命の世界は目的の世界である。しかし、生命世界全体には、これといった目的はない。

生まれたばかりの赤子が、無意識に手足をわにあわにあと動かしている。根源的の生命の衝

動。人為を超えた力。大自然の、宇宙の力。

すべての事象は、相互に関連する出来事の連鎖から創発してくる。だが、その創発してきた事象は、多くの業を背負っている。

われわれは、単に棲み分けているのではない。

すべての存在は神の玩具である。

自然の多様性。自然の遊び、自然の戯れ。

自然は神のお洒落である。

一切は遊びである。

自然は遊ぶ。遊びは無目的である。自然を目的論だけからとらえてはならない。

人間は約束を破るが、自然は約束を破らない。自然はもともと約束をしない。なるほど、自然には自然法則があるというかもしれない。しかし、これは、ある意味で、人間から見た法則にすぎない。自然は常にこれを超える。自然は法則通りに動く人間に約束したわけではない。

自然は八方美人である。私から見れば、私むけの面を見せ、君から見れば、君むけの面を見せる。

## 認識について

人間の意識の流れは一次元的である。しかし、それが一次直線でしか表示できないかどうかは別問題である。

いかに客観性を誇る科学たりとも主観性を免れない。それは、ある面からの現象の切り取りにすぎないからである。

記憶や思考や意識が、すべてニュートンの生化学的物質のやりとりや変化だけで説明できるわけではない。第一、説明できると考えている理論の構造そのものを、生化学的物質のやりとりや変化で逐次説明した理論がないではなか。

物と物が引き合うことを、古代の哲学者は〈愛〉と言い、近代の科学者は〈引力〉と言った。

現代の理論物理学は、なお、実在から意識を排除して考えようとしている。また、生成するものを存在だけから見ようとしている。そこに限界がある。この二つの限界から、宇宙が多次元になったり、多世界になったり、複雑になつてしまうのではないか。意識と生成を単なる対象と存在に閉じ込めて記述しようとすると、無理が出てくる。もしも、モナドに意識があり、その相成から、自己形成が起きてくると考えれば、世界を二重三重にする必要はなくなる。プラトンも、生成する世界を存在から捉え、意識を実在から分離したために、イデアは理性の目で見えない存在になつてしまった。その結果、世界は多次元化した。現代物理学は、なお、プラトン主義の尾を引いている。

相互射映論は、あらゆる面での認識の論理として通用する。

理、ことわりとは事割のことであり、これをはつきり分けるのを断りという。また、わかる、理解するとは、分けることである。

矛盾。世界は矛盾に満ちている。あらゆるパースペクティブはこれを映す。だから、パースペクティブ同士は矛盾する。矛盾は、主観でもあり、客観でもあり、主観でもなく、客観でもない。

認識とは苦痛である。

人は、ザルを手にして水を求める。そして、ザルを水だという。しかし、ほとんどの水はザルから漏れてしまっている。ザルを捨てよ。水そのものを見よ。

いかなる理論もザル理論である。すべての現象を拘うことはできない。必ず漏れるものがある。

Aの主張には、非Aの主張が同等の権利をもつて成り立つ。どちらか一方の主張に固執できる者は幸いである。

人は、しばしば、原因と結果を分け、一因一果の単純な因果関係でものを見る。実際は多因多果、結果が原因に回帰する。

曲がったものから真つすぐなものを見ると、それは曲がって見える。

現象に忠実でありさえすればよい。世界は決して合理的にも整合的にもできてはいない。無理して合理性や整合性を追求したなら、世界を合理性や整合性の狭い領域に閉じ込めてしまう。それはひとつの抽象であり、存在の全体ではない。

人間は、現象が分からないとき、その原因を現象の彼方に設定して、現象を理解したつもりになる。神話、哲学、科学、すべてそうである。現象そのものを理解しなければならぬ。

比喩としての認識。比喩はひとつの認識である。分析的、総合的、推論的認識と並んで、立派な認識である。

地動説は、太陽の動きを地球の動きと解釈する考えである。つまり、客観を、主観との連関で捉える考えである。その意味では、それは、ヨーロッパ近世の世界観とは違うものを含んでいた。もっとも、地動説を支持したデカルトにおいては、主観と客観は分離されていた。

客観性とか普遍性は主観性のかぶる仮面である。たとえば、科学的客観性、科学的普遍性たりとも、最後には主観性が残る。もともと、主観と客観は切り離せないのである。

悪無限の原因適及は、なんら本質理解にはならない。原因の原因の原因——を尋ねていっても、そのものを理解したことはないのである。原因適及をすればするほど、本質から遠ざかる。

論理的規定は正確厳密のようにみえながら、いたって曖昧である。たとえば、法解釈の多様性。多くの法律家がそれで食っている。

群盲象をなでるがごとしという。耳を触っている者は、ひらべつたいものだと言う。足を触っている者は、柱のようなものだと言う。しっぽを触っている者は、ヒモのようなものだと言う。誰が事実を知りえようか。科学者という群盲も、常に、自然という象をなでている。

三本煙突を正面から見ている者は、二本だと言う。斜めから見ている者は、二本だと言う。横から見ているものは、一本だと言う。矛盾しているように見えるが、矛盾しているのは事実ではなく、観測者の方である。事実においては、反対者は一致し、矛盾は統合されている。しかも、その事実には観測者が入りこんでいる。

知性は混沌を恐れる。だから、知性はそれを整理し、秩序づける。しかし、世界の始源は混沌である。とすれば、知性は自らを否定し、この始源の混沌に帰らねばならない。

もしも仮に、日食や彗星の出現が毎日あったとしたら、かつての人々でも、それを忌み嫌いはしなかったであろう。人は、たまたまある非日常的なものに、特別な意味を与える。奇跡も、始終起きていたら、奇跡ではなくなる。

四分法。人は、四分法の一つだけとってきて、何かを主張する。真実は四分法のすべてであり、それぞれが四分の一の真実を語っている。四つとも、同等の力をもって成立する。

楽あれば苦あり。苦あれば楽あり。  
楽あれば苦あり。苦あれば苦あり。

強者は強者を好む。強者は強者を嫌う。  
強者は弱者を好む。強者は弱者を嫌う。

信ずる者は強い。信ずる者は弱い。  
信じない者は強い。信じない者は弱い。

想像力は人を益す。想像力は人を損なう。  
想像力の欠如は人を益す。想像力の欠如は人を損なう。

禍は転じて福となる。福は転じて禍となる。  
禍は禍を呼ぶ。福は福を呼ぶ。

鏡を見て自画像を描く。ビデオで自分の映像を見る。テープレコーダーで自分の声を聞く。自己意識、自己言及の比喩。

科学理論は、自然に対して受動的ではなく、能動的である。観測するということは、観測されるものと不可分である。

行為の中で、存在と認識は一つになっている。行為の中にこそ、存在と思惟の一致はある。

川の流れの水は川の形に従って流れると同時に、その川の形を変えていく。行為は状況に添うと同時に、状況を切り開く。

## 学問をめぐる

わが国の哲学界は、西洋の哲学者の解説ができれば、それでいっばしの哲学者でございという顔ができる。講壇哲学。それがあまりにも一般化しすぎたために、それが本来のあるべき姿のように思われている。そのために、独自性のあるものが排除されてしまう。それでいて、彼らに独自性があるのかというと、ない。なにひとつない。

わが国の哲学界はカエルの集団のようなものだ。サルトルが出てくれば、サルトルに飛びつき、フーコーが出てくれば、フーコーに飛びつき、デリダが出てくれば、デリダに飛びつく。飛びつくだけで、商売がやっつけていける。

過去の偉大な文学作品の引用ばかりで出来た文学なんて、文学ではない。どんなに貧しい文学でも、文学はオリジナルでなければならぬ。過去の偉大な絵画の模写は、模写であって、作品とは言えない。過去の偉大な音楽の楽譜を写してきただけでは、作曲とは言えない。科学だって、過去の偉大な科学者の論文を写してきただけでは、科学論文にならない。ところが、哲学では、過去の偉大な哲学者の著作の引用、解説、注釈だけで、立派な哲学論文になる。

そんなに多くの思想家達に愛想よくはしてられない。私は私の思想を語る。

諸科学の細分化による統一ある世界観の喪失。だからと言って、団体を組んで、皆で論文を書き、(講座)を作ることによって統一ある世界観が作れるものでもない。それは、羅列である。

昔から学校哲学というものはくだらないものである。それは、プラトンでも、ニーチェでも、みな、訓読注釈の材料にしてしまおう。それが正統な学問であり、それさえやっていけば、いっばしの哲学者の顔ができる。独創性の喪失。考えてみれば、デカルトも、シヨールペンハウアーも、ニーチェも、このことを批判していた。

哲学が哲学史に迷い込むとき、創造性は枯渇する。

講壇哲学者達、彼らはニーチェの解説をする。しかし、ニーチェはこれをもっとも嫌った。

大学でデカルトが講じられる。現代のスコラ哲学。デカルトは、なによりこのスコラ哲学から脱しようとした。デカルトは、だから、学校を捨てて社会に出た。

われわれが大学で習った哲学教授達は、自分が専門とする哲学者の文献内容を実によく知っていた。ただ、彼らが知らなかったことは、「われわれは本来無知だ」ということである。ソクラテスに帰れ。

プラトンはプラトンを引用しなかった。ニーチェはニーチェを引用しなかった。彼らは自分で考えた。プラトンの専門家はプラトンで十分である。ニーチェの専門家はニーチェで十分である。

彼ら、講壇哲学者達は、事柄について考察するのではなく、事柄について考察した哲学者について解説するにすぎない。

私の習った哲学教授、N教授は、一日に英語と独語と仏語とラテン語の本を4冊読んでしまうという神話の持ち主であった。しかし、語ることは、デカルトやカントの解説ばかりであった。自らの哲学を語ることは、ついになかった。頭のよい人だった。

頭のよい人達は人の頭で考える。

私は、学生の頃から、自分が習っている哲学教授達に批判的であった。彼らは、哲学史上の多くのことを熟知していたが、しかし、自分で考え、それを表現しようとはしなかった。彼らは哲学者ではないと、私は判断した。

他人の頭で考えるな。

西田は徹底的に自分の頭で考えた。西田哲学会の奴らは西田の頭でしか考えない。

私はデカルトになる。なぜなら、大学教授どもは、相変わらずスコラ哲学をやっているからだ。私はショーペンハウアーやニーチェになる。なぜなら、大学教授どもは、相変わらず講壇哲学をやっているからだ。それも、あろうことか、彼らは、デカルトやショーペンハウアーやニーチェの訓話注釈をやっている。

自分で考えることを忘れた哲学研究者に対しては、歌を忘れたカナリアに対するほどには、あわれを感じるできない。

私は、世界の中にあって世界を問う者として、世界と格闘している。そこには、世界と私しかない。世界と私の間にプラトンやアリストテレス、カントやヘーゲルが介在してもらっては困るのだ。

人文系の学問が、過去の作品の翻訳、注釈、解説に終始するとき、もはや創造性を失い、新しいものを生み出さなくなる。過去の遺産の食い潰し。

先人の業績を踏まえていない。学問的体裁が整えられていない。引用が不正確だ。などと  
言って、今日の学会人達、論文審査する大学教授達は、独創的なものを拒否する。それは、  
十九・二十世紀の人文系学問が硬直化し、訓古注釈化し、衰弱化し、創造性を喪失したこ  
とを表す。

むやみと引用し、出典がどうのこうの、何頁の何行がどうのこうのと、そんなことばかり  
を問題にする。創造力の喪失。

文献学、これが流行するとき、その時代精神はすでに衰退してきている。現代然り。ヘレ  
ニズム・ローマ然り。

文献学。文献や註への固執。過去への拘泥。学問の骨董学化。創造性の喪失。

引用とは、我が田に水をひくこと。

現代、この巨大化した時代においては、専門家が重んじられる。その全人格ではなく、そ  
こから切り取られた人格の断片、専門という断片が重んじられる。

井の中の蛙は、少なくとも井の中のことに関しては、大海を知る者よりも、よく知ってい  
る。洞窟の囚人は、洞窟の外を知る者よりも、洞窟の中のことについてはよく知っている。  
しかも、彼らは、大海や洞窟の外について知らないことを誇りとしている。

現代の学問や教育。抽象的、断片的知識が偏重され、生の全体性との密接な連関が失われ  
る。

根源的思考の欠如。オリジナルを認めない風土。いろいろな思想の解説。基礎理論が発達しない。わが国の人文・社会科学。

わが国は、明治以来、なにしろ西洋のものなら、二流でも、三流でも尊ぶというお国柄だった。これは、わが知識界の悪弊でもあったが、この悪弊は、今でも残っている。この国では、同じことを言っても、日本人の言うことなら、蔑ろにする。黙殺、そう、これがよく使われる。

今日のわが国には、生きた哲学がない。哲学は単なる哲学研究と化し、骨董学化している。哲学の死を生き、哲学の生を死す哲学がない。

音楽は、作曲、演奏、鑑賞と分かれている。ところが、哲学は分かれていない。しかも、わが国では、演奏や鑑賞が多すぎる。作曲が少ない。独自性を認めない風土。

作曲でなく、演奏や鑑賞が尊ばれる風土、日本。音楽だけでなく、思想も。

この国では、外国の思想家の解説ができさえすれば、一流の知識人である。自分の頭で考えようとしない。

わが国の思想界。流行の歌謡曲のカセットを回しているだけ。思想の買い物。

ただ要領よく西洋の流行の思想を輸入し、これを手早く解説し、引用し、あれこれミックスしただけで、ときに天才的思想家ともてはやされる。そこには、自己本位というものがなく、主体性がない。ただ、他人の頭で考えているだけだ。それは、明治以来の日本の悪弊だった。彼らの書くものは、西洋人の書いたものの引用で満ち溢れ、誰それはどう言っている、誰それはどう言っていると書きならべ、それで、おまえはどう考えるのかというのと、さっぱり独自の答えは返ってこない。自分の頭で考える。わが身のよって立つところから考えよと言いたい。しかし、そのように、よって立つところを失ったところから、(秀

才思考は生まれてくる。わが国の思想的貧困。

みんなて翻訳し、解説し、それでひとかどの哲学者でございという顔ができる国、そして時代。

日本の哲学研究も宗教と変わりがない。あるひとりの教祖がいる。それを巡って学会を作り、ああでもない、こうでもない議論し合う。そのうち秘教化する。飛びかう言葉は符丁化する。教祖のまわりに教団が形成されていく。そこからは、なにもものも生まれない。

日本の学者。注釈学者。通訳者。請負業。他人の頭で考える人々。非凡の圧殺。

翻訳。輸入業。請負業。

わが日本人は哲学に弱い民族だ。情緒埋没的。

日本人論の誤り。人類一般の性格を、日本人独特のものと見誤る誤り。近代人の特徴であるものを、日本人独特のものとみる誤り。日本人の悪い面だけ取り上げて、それを、他国の理想化されたものと比較する誤り。または、その逆。日本も、他国も、よい面もあれば、悪い面もあるのに、それをみない誤り。なんでもかでも、農耕社会と牧畜社会などの対比で片付ける誤り。低次元から高次元を決めつけてしまう誤り。例えば、肉食文化と草食文化。島国と大陸で、なんでも説明してしまう誤り。民族の性格だけみて、精神をみない誤り。自国のことはこまこまと見えているが、他国のことはおおまかにしか見えていないことからくる誤り。比較というものがよく陥る誤り。比較は共通条件でみなければならぬ。認識の基準をどこにおくか。

日本人は、昔から、小さなことに一点集中し、ひたすら突き進むことに優れた能力を発揮してきた。逆に言えば、大局観をもたない。百年単位の戦略で動くことができない。大局観の必要な政治や戦争は不得手。現場処理と短期戦。古事記の神話でも、小さな話はお伽話風に並べられているが、全体の大きな体系はない。哲学でも体系的思考は苦手。結局、

徒然草のエッセイになってしまふ。文学でも、短編が得意。音楽でも、交響曲は苦手、歌曲なら優れている。なにしろ、俳句や短歌を生み出したお国柄なのだ。大局観の欠如。日本人は、これで失敗するだろう。

ヨーロッパが精神的に自信を失いつつあったときに、日本は、ヨーロッパを理想に近代化を始めた。レービットは言った。これと同じことは日本にも言える。日本が精神的に自信を失ったときに、アジアは、日本をモデルに近代化を始めた。

ソクラテスはアテナイの虻であつた。私は日本の蜂である。

西洋の意思決定のしかたは弁証法的である。弁論によって正反を対立させ、その対立と均衡から意思決定していく。その思想は、方程式や複式簿記にさえ表われている。日本の場合は、衆議と空気が、雰囲気と情緒によって決まる。

## 社会について

イデオロギー思考の虚妄。自己正当化。自己自身に罪があることを認識しない。思考停止。レッテル張り。自らは安全地帯にいて他を批判する。そして、大概は知行不一致。偽善以外の何ものでもない。

左右を問わない。イデオロギーは物事を単純化する。大衆社会の神話。呪術や宗教の代替物。

イデオロギー志向は、大概、知行が合一しない。自己正当化の神話にすぎないから。

ナチズムの《民族》《人種》、共産主義の《労働》《人民》。実体から懸け離れた概念、叫び。

レットテル思考。これは張り紙貼りの思考だ。事柄という電柱に張り紙を貼って歩く。あまり多くの同じような張り紙がベタベタと貼られると、人は張り紙の方を電柱だと思ってしまう。

何ごとも、人間は、理由なくして行動できぬ。しかし、理由さえつけば、人間は自分連自身をも殺すことさえできる。

イデオロギー。それさえ立てられれば、人は、人を殺しさえできるのである。

イデオロギー。これによって人を殺してきたのが、二十世紀であった。実に、人間は幻想を追う動物である。

極端な善への盲信はいつも極端な悪と同居する。ナチズムやコミニズム。

民衆は十分食っていけさえすれば、頭の中で回すイデオロギーのカセットはどんなものでもよい。民衆の健全さ、したたかさ、頑固さ、逆の柔軟性、変わり身のはやさはここからくる。

酔っぱらいの国では、しらふの者の方が酔っぱらいにされる。狂人の国では、正気の者の方が狂人にされる。

まっすぐな木は、曲がった木から見れば、曲がって見える。曲がった木は、いつも自分をまっすぐだと思っているからである。

マルクス主義が、十九世紀末から二十世紀後半にかけての現代を支配したのは、その黙示録的性格による。虐げられた者こそ勝利するという思想。嫉妬の時代。

人間は、ひとつの社会体制を選び、政治・社会的な生き方を決定するのに、どれほど多くの理論を必要とすることか。動物達は、自然の理法に従って、自らの生き方を何千万年も続けている。何の理論も必要としない。

私有制を否定すると、一独裁者によって、国家全体が私有されてしまう。

無秩序の恐怖と秩序の恐怖。

犬が吠えるとき、犬はまだ安全地帯にいる。本当の危険が迫ったとき、犬はもはや吠えない。

狼の吠えるとき、人は黙す。

革命とは、社会というマッチ箱をひっくりかえしてみるようなものである。ひっくりかえしてみたところで、マッチ箱はやはりマッチ箱である。

民主主義はどこがよいのでしょうか。それは、万人が平等だということです。民主主義はどこが悪いのでしょうか。それは、万人が平等だということです。

民主主義の時代、衆愚の時代は、自らの性状にあわせて代表者を選び出してくる。

政治一般がそうであるが、民主主義は幻想を売る商売である。明日にもユートピアができるような公約を出し並べ、票を挿つ攫っていく。それは実現される必要はない。大衆は、ただ、その幻想に投票するだけである。だから、政治家は、いかにこの幻想をつくるかということに血眼になる。民主主義は、幻想という美人への人気投票なのである。

民主主義は、みんながかたまってやれば、なんでもできると考える。しかし、猿がいくら集まっても、出てくるのは猿知恵である。それどころか、民主主義は、みんなで寄ってたかってすぐれたものを引き下げてしまえばいい。百万の凡人より、一人の天才。天才の仕事は量では計れない。

人間は、生まれながらにして不平等である。

万人はあまねく愚かであるという点で、平等である。

自由は不自由においてのみ成立する。平等は不平等においてのみ成立する。

自由主義の背理。自由は自由を否定するものを否定できない。

政治は、幻想をつくりだすことによって権力を維持する技術である。つまり、詐欺である。

政治は幻想である。

政治は悪と悪の戦いである。もともと、その悪はつねに善を装う。そして、他の悪をあげつらってやまない。

この世は、偽善、虚偽、幻想によって構成されている。宗教、政治、文化、経済さえも、つまり、詐欺である。

戦争の類落。非戦闘員をも犠牲にする総力戦。代理戦争。ゲリラ戦。テロ。二十世紀から二十一世紀にかけて、戦争は無秩序化し、類落してきた。

近代の戦争は悲惨である。それと同時に、平和もまた悲惨である。戦争が野蛮になったと同時に、平和もまた野蛮になった。悲惨な戦争。悲惨な平和。

どんなに平和を祈っても、それは乙女の祈り。祈りだけでは、戦争はなくなるならない。

戦いに正義はない。勝った者が正義になり、負けた者が不正義になる。

問題なのは、あからさまな悪ではない。そうではなく、正義を装う悪である。そして、いつの時代でも、悪は正義を装う。

正義、実に空しき喧騒。

正義とは、エゴイズムのかむる帽子である。

倫理はしばしば闘争の道具になる。

この世は戦いである。

悪を否定する世界にこそ、悪は潜入する。

悪を容認しない社会は、必ずそれ以上の悪を生む。それどころか、その社会全体が悪になる。

人間社会が人間の食欲によって成り立っている以上、人間社会がまともになるはずはない。いつの時代も。

ああすべき、こうすべきと、人は言う。それでいて、一向にああもならず、こうもならない。それどころか、ああもこうもならなくても、一向に気にしない。ただ叫んでいるだけ。人は叫びによって生きている。

何々しなければならぬ。何々すべき。(べき)への逃避。

(べきの思想)。何々すべき、何々すべきとは言う。そして、それが、時代ごとに目まぐるしく変っていく。何ひとつ解決されぬままに。掛け声と叫び。人は、それによって生きていく。言論家も、それによって食っていく。

俗受けのする(べきの思想)が流行する。ああすべき、こうすべきと言う。革新を説いてもいい。道徳の回復を説いてもいい。宗教の必要性を説いてもいい。それが実現されようが、されまいが、人は安心する。

叫びの時代。叫びのもとには人は集まる。それでいて実行されることがない。当為と存在の乖離。知行の不一致。

人は、自己の都合に合わせて、思想をころろ変えて平気である。思想のカセットを回しているだけ。だから、いつでも切り変え可能。今、活躍している評論家や政治家を見よ。若いとき何を言っていたか。

まだ舌の根も乾かぬうちに、手のひらを返すようなことを言うといつて、人は人を非難する。しかし、非難する者も、舌の根が乾いてから、手のひらを返すようなことを言うにすぎない。三日か三ヶ月か三年の違いにすぎない。

戦時中は、戦争礼賛者が善人であり、敗戦後は、戦争反対論者が善人である。そして、人は、いとも簡単に善人になっていく。

転向の構造。転び切支丹の心理。

法律、それは人間の最低基盤の道徳である。しかし、最低の道徳であるがゆえに、それは、時折、人間の道徳性を阻害する。法の中には、すぐさま悪が忍び込む。考えようによっては、人間の社会は、合法的な悪によって成り立っているとも言える。

主権、それは、本来どこにあるわけでもない。王にあるのでも、人民にあるのでもない。あえて言えば、慣習法のなかにあるのだが、その慣習も変わる。

契約の思想。これは、人間不信と人間信頼の両方に基づいている。

現代では、ゲマインシャフトがゲゼルシャフト化し、ゲゼルシャフトがゲマインシャフト化する。

一年中働きずくめだったアリたちは、冬になって、慰勞を兼ねて音楽会を催した。そこで呼ばれたのが、一秋中バイオリンを引いて遊んでいたキリギリスだった。キリギリスは、アリたちに感動を与え、たくさんの報酬を貰って裕福に暮らしたという。物と心の交換ができれば経済が成り立ち、生きていける。

コミュニティとはなにか。コミュニティとは目に見えないネットワークであり、バーチャルなものである。仮想現実の一種。

会社はトカゲ以上である。シッポばかりでなく、シヤツポまで切って生きのびる。

## 歴史について

人間の歴史は蓮の花の咲かない泥沼である。

歴史に初めも終わりもない。完成もない。すべては過渡期である。

人間の歴史において、私が見るのは、人間の典型である。われわれは、典型によって認識している。

人間の歴史を振り返ってみるに、人間は何千年の間、作っては壊し、壊しては作り、実に愚かなことを繰り返してきたと言わねばならない。

人間の愚かさ。歴史はまさにそれによって成立している。もしも、人間が神のごとく完全無欠であったなら、争いことも、過誤も、悪害も生じなかつたであろう。つまり、歴史はなかつたであろう。

世の中はすべて偶然によって動いている。予測や意図以外の思いもおよばぬことによつて動いていく。

予想は大概外れるものである。予想には希望が含まれ、希望しているかぎり、それから外れたものは見えない。しかも、現実には、大概予想からそれたことが起きる。

予言は、予言が実現されえないがゆえになされうる。予言は、予言が実現されないことを前提している。実現されたなら、予言の効力を失う。

歴史はいつも予想外のことによつて変動する。予測もできない。法則もない。

歴史は何度行きつ戻りつしてきたことか。人の心は、その度ごとくころころと変わつてきた。

人は生まれ、人は死す。国は興り、国は滅ぶ。世は移り、世は変わる。歴史とは、ただ、それだけのことも知れない。

歴史に法則性、因果性のみを見ようとする、歴史の本質を見落としてしまう。時代像を見なければならぬ。

未来の予想は、現在においてしか意味をもたない。

人間の歴史を人間自身が動かしていけるという考えは、近代に始まったものである。だが、人間が人間を超えるものを忘れ、歴史の支配者になったことは、人間に、幸福よりも不幸をもたらした。

人間の歴史は、人間の行為の試行錯誤によってつくりあげられてきた。それは絶えざる試みであり、絶えざる失敗であった。

驕る平氏は久しくはなかった。しかし、驕らなかつた源氏も久しくはなかった。

人間の歴史、それはひとつの大きな迷いである。実に迷いである。

歴史はひとつの大きな生き物のようである。個人を超える力。

大海に群れ遊んでいる魚をすくうように、なんの法則もなく歴史上に偶然点存在する無数の出来事のなかから、人は、必然とか因果とか運命という網にかかるものだけを取り出してくる。

革命家と政治家。革命が成功して政治の時代に入ると、革命家は滅ぶか、実権を失う。または、革命をもう一度やり直そうとする。

人間は、平和を好むと同時に戦いを好む。それゆえに、人間の歴史は、戦争と平和、希望と失望を、飽きもせず繰り返してきた。

人間の歴史が永遠に進歩していかなければならないとすれば、それは、人間にとって、永遠の苦痛となるだろう。

歴史の観測と行為が歴史の中にある以上、歴史は不可知である。

太古からの人類の歴史、それは、また、民族移動の歴史であった。要するに、人間は、昔からうろろろしていたということである。歴史を定着からとらえてはならない。

英雄の末路はいつも悲劇で終わる。悲劇で終わらぬ英雄など、英雄ではない。

英雄とその死。人は、それ自身が成功した原理そのものによって滅ぶ。

歴史は偶然を好む。歴史は右往左往する。歴史は迷いである。

人々は、おおむね、進歩主義者である。彼らは、昔は悪く、今は良く、未来はもっと良くなる。良くしていかなければならないと思っている。本当に、人間は進歩するものなのだろうか。

人間はどこまでも不完全である。不完全な者を不完全な者が否定し、それを繰り返す。人間の歴史は、これによって成立している。

過去はよき時代だったのだろうか。現在はよき時代なのだろうか。未来はよき時代になるのだろうか。歴史は愚かなことの繰り返しだった。歴史に幻想をもたないこと。

復古のない革新は盲目であり、革新のない復古は牢固である。

ものことは、行き着くところまで行き着かなければ、反省が起きてこない。行き着くところまで行き着いても、反省が起きてこないこともある。

革命は、それが成功したときには、いつも急進派の勝利となり、しかも、その独裁となる。そして、本来意図していたこととは逆のことが実現する。

模倣は独創である。模倣こそ歴史をつくる。写し取られ、模倣されていくものこそ、歴史における変わらないものである。

バスカルの鼻がもう少し高かったとしても、世界の歴史はそれほど変わらなかったであろう。

歴史は文学であり、物語である。

近代歴史学批判。歴史することが、単なる史料の収集と解説に墮して、単なる合理的推理に墮してしまった。そして、生きた歴史を語らなくなった。現代の出来事が生きているのと同様、歴史的事実も生きたものだった。

近代史学一般を支配している因果律による歴史認識は間違っている。歴史認識は時代像を明らかにすることに向けられねばならない。政治、社会、経済、宗教、文化などに、ひとつの時代像がどのように表現されているかを見ること。どれかひとつが原因でも、結果でもない。

歴史学も、歴史教育も、歴史への畏敬の念をもたねばならない。否、人生そのものが。

歴史は、あまりにも長くなりすぎた。この歴史の重荷を下ろさねば成らない。ニーチェの言うように、忘却が必要。そうでなかったなら、歴史自身が自らの重荷に耐えかねて、自ら滅ばねばならないであろう。

歴史の浄化作用。これは、歓迎されるべきである。歴史は清掃作業人なのだ。下らないものをことごとく追い遣ってくれる。ただ、まともなものも一緒に。

無理が通れば道理がひっこむ。人間の歴史は、無理ばかりが通ってきたように思われる。道理は常に敗北してきた。

いかなるものも滅ばぬものはない。無常観、それは、人事・自然一般の歴史性・時間性をあますところなく語っていた。

人間はいつまでも同じことを繰り返す。

人間の歴史。人間は、飽きもせず愚かなことを繰り返してきた。

歴史を救おうなどと考えるな。少しでも考えたりしようものなら、歴史に拘わられてしまう。

誰も歴史を超えることはできない。時代を超えることもできない。

何事も、やがてはすたれるはやりにすぎない。

人類の文明も永遠ではない。芸術も永遠ではない。真理も永遠ではない。すべては移ろいゆく。

歴史は重荷である。過去も重荷であり、現在も重荷であり、未来も重荷である。

長くなりすぎた歴史は、生まれ故郷に帰って、その重荷を下さねばならない。

終末はいつも始源に潜んでいる。

## 芸術について

芸術の本質が再現にあるとしても、そこには、抽象、限定、否定がなければならない。単なる模倣、模写ではない。芸術が様式、型であるのも、そのことによる。

人間は自分に似たものを作る。人形、銅像、ロボット、そして神。なぜか。再現による自己認識。

少女の美はかたよりの美である。しかし、そのつかのまの美は永遠であるかのようにみえる。彼女がすでにその美から去って行ってしまったときでも、美だけは永遠であるかのようにみえる。

実在性の現成。それが美、目前に実が現われる。例えば、花の美。

美しいものは果敢ないものであり、果敢ないものは美しい。

デウス・エクス・マキナ神は機械仕掛けからは、劇構成の必然性を壊すものとして非難される。しかし、この必然性は、近代の因果関係としての必然性にすぎない。それは、こざかしい必然性だ。ギリシア劇におけるデウス・エクス・マキナは、もつと大きな必然性からきている。その必然性は、宗教にまでつながっている。近代芸術の立場からは、それがいかに奇異に見えようとも、非難されるべきではない。むしろ、その奇異感こそ、近代劇の限界がある。アナンカイオン（運命）の喪失。近代。

悲劇の本質。死の悲痛と死の満足。運命と永遠。

よく言われることだが、悲劇の方が、むしろ、人間の愚かさをしらずに出して、逆に喜劇的であり、喜劇の方が、人間の悲しさをうちに秘めていて、かえって悲劇的である。例えば、チエーホフ。

復讐の完成は復讐の終わりであり、復讐は完成しない。復讐は、その本性上、自己矛盾を含む。ギリシア悲劇では、このことが、神々、英雄、人間の関係において象徴化されている。復讐の運命は、人を狂気に導く。（エウリピデス「オレステース」）

古典文学、例えばシェイクスピアやセルバンテスの（途方もなさ）。それは、逆に、それらが、ギリシア古典文学のように、大きな尺度のうちにあるからである。そこにはコスモロジーがある。それに対して、近代の自己表現文学には、この（途方もなさ）がない。小さな尺度しかもたなくなつたからである。そこにはコスモロジーがない。

芝居は、自然にやろうとすればするほど、それだけ一層不自然になる。写実劇の限界。

洗練された芸能の土台には、民衆芸能の地盤が必要である。しかし、それにしても、何ゆえ人間は踊るのか。踊る動物。人間。

虚を虚と知りながら、虚の中で戯れている。そこに遊びがある。そこから演劇が生まれる。

ここでは、虚が、実以上に実である。

笑いの芸術。ベルクソンは、笑いの本質を優越感にみた。しかし、これは、まだ、程度の低い笑いである。笑いや面白さの本質は、再現前化と脱自性にあるのではないか。

笑いとか滑稽の源泉のひとつに、無常ということがある。

能。ひとつの象徴詩劇。否定の美学の典型。

否定の美学。芸術は現実を超える現実でなければならない。

短歌などで、花や風に自分の心を託す。この託すということは、また隠すことでもある。隠すこと、そこに芸術は成り立つ。隠すこと、暗示することなくして、美は現われない。言葉の本質から言っても、表現とは、明らかにすることであると同時に、明らかにしないことである。否定の美学。

芸術においては、心は型のうちに隠される。しかし、また、心は型を破ろうとする。型と心の否定的緊張関係のうえに、芸術は成立し、生成する。型の創造と型破り。否定の美学。

間について。ひま、間違い、間延び。時間は、時と時の〈あいだ〉のことである。この〈あいだ〉が開きすぎたり、行き違ったりする。それは、出来事の関係から生まれる。

文学、詩、絵画、音楽、芸術的表現は生命の衝動である。

文芸評論の本質は、他人の語ることを借りて自己を語ることだという。つまり、他人の権を相撲をとるということ。

作品は、作品として公にされたとき、作者に復讐してくる。その復讐に作者が耐えて、はじめて、その作品は作品でありうる。作品の公開性というものには、それだけの厳しい試練がある。そのような試練を知らぬ作者が、今は多い。実に多い。ただ、もてはやされているだけ。

単なるなまのまの感傷を素晴らしい詩歌とみなす誤り。単なる幼稚を新鮮さとみなす誤り。単なる際物にすぎないものを迫力あるものとみなす誤り。単なる破壊を創造とみなす誤り。単なる型破りを新しい型の登場とみなす誤り。単なる風俗を芸術とみなす誤り。今日のマスメディア。芸術感覚の類落。

実在性のないところに美はない。

美はいつも不安である。

美のアイデアも永遠ではない。何をもちて美とするかも、時代、時代によって違う。

モーツァルトの楽音たりとも、秋の虫の音からみれば、雑音である。自然の造化は微妙である。人間の技芸には限界がある。

美は日常性からの離脱である。日常性、それは迷いである。そこから離脱するとき、純粋性が顕れ現われ、それが美となる。その意味で、美は一種の祝祭であり、狂気を孕む。

フィギアスケートの旋廻舞踊は、生命と宇宙の循環を表現するものだろう。シルクロードやベルシア起源ではないか。

偽傷。鶴の母親が雛を護るために、傷つき倒れたふりをして、敵を欺く。これは模倣であり、演技であり、一種の虚偽である。だが、芸術は、この虚偽から始まる。それが、実以上に実である。芸術の起源。

## 宗教について

人間は相対と絶対の分裂の中に生きている。相対の中にも、絶対の中にも、そのまま安住することができない。

いかにして生きるべきか、生きる意味はどこにあるか、などを考えて生きねばならないというのが、死すべく運命づけられた人間の宿命である。同じく、死すべく運命づけられて生きている動物は、そんなことは考えずに、生かされて生き、そして死ぬ。

煙突の上に載せられた石ころは、自由をもたないから、不安がない。不安がないから、落ちない。ところが、煙突の上に立った人間は、自由をもつから、不安である。不安だから、落ちる。どこへ落ちるのか。無の深淵。

人間の故郷喪失。人間が人間として大地のもとに立ったとき、そのとき、すでに人間は故郷を追われたさすらい人になっていた。

人間が自己を死すべきものと自覚したとき、人間は、永遠なもの、不死なるものを自覚した。永遠なもの、有限と無限の間に、人間はいる。

大なる運命は、人間の小さな運命に拘泥しない。

なぜ、人は人を殺すことがあるのか。なぜ、殺さねばならないことがあるのか。そこには、それだけの宿業というものがある。しかし、そういう宿業というものを持たない殺人のまただんと多いことか。

法の世界では、犯罪に悔恨がない。だから、救いがない。

人間性、それは、人間を超えたものでなければならぬ。人間の本性は、人間を超えたものから出てくる。

畜生からみれば、人間ほどあさましいものはない。

人間、この空を見上げる者、そして、下をうつつむく者。

地上の無常なものを自覚したとき、そのとき、人間は永遠なものを見た。

人間、この地にありて天を見上げる者。人間は、天と地の結合において成り立っている。

人間は大地の子である。ただ、大地は時折鬼子を生む。

子供は泥と水と風から生まれてくる。

無垢はなお不安である。

赤ん坊が眠りこけて無意識に乳を呑んでいる。人間の意識、知・情・意などというものは氷山の一角にすぎない。その下に無意識の世界が大きくひろがっている。人間は、それによつて生かされている。

赤子にこちらを向かせようとする。しかし、どうしても向かない。これが自由意志というものである。生あるものにはこれが備わっている。それゆえに、悪にも走り、善にも走る。

性悪説は人間の本質をよく見ている。単純な性善説は人間観察が足りない。人の悪なる面を見ることなくして、宗教も出てこないであろう。善を求める者こそ、人の悪を見る。人の悪なる面を見ていけば、人に裏切られることもないであろう。自分自身の中の悪から目をそらすな。

人は、死ななければ、悟りも、救われもしない。解脱もできないし、涅槃にも至れない。業、罪、悪は逃れられない。

忽然と生じる無明は、また、大覚から生まれるものである。

大地震と大津波。大自然の猛威の前の文明の果敢なさ。しかし、親を奪い、子を奪っていった大自然にもかかわらず、それに向かって祈りを捧げる姿。そこに、今日の文明が忘れてきた何ものがある。

歴史の終末の時、最後の審判があるという。しかし、その時がくれば、人々は、先を争って悔い改めるであろう。かくて、悪人は一人もいなくなるであろう。楽園は、偽善者の楽園となるであろう。

自己超出の概念。それが自由である。だから、自由は、神と人との関係をも超えていく。悪への自由。神からの自由。

人は、そう年がら年中、神と合一しつばなしでもいられない。悟りつばなしでも、救われつばなしでもいられない。ただ、憎しみや恨み、煩惱生死の足下に、神の救いや悟りはある。

イエス・キリストも、仏陀も、親鸞も、性悪説であり、ベシミストであった。

真の宗教家と偽の宗教家の違いは、前者は人間の罪・悪、弱さを徹底的に知り、体験し尽

くし、そこから出発しているのに対して、後者はそれを知らず、押し付けがましく説教したり、いかがわしい予言をしたりするところにある。今日では、後者の方が、さも偉大な宗教家でもあるかのように、大衆にもはやされる。

宗教的真理はいつも逆説を含んでいる。

すべてのものが許される場所。そこから見れば、この世の悪は、はるか遠くの異郷の風景のように見える。そのような根源的場がなければならぬ。不正も、裏切りも、恨みも、怒りも、墮落も、邪悪も、戦争や殺戮さえも浄化され、包まれる場がなければならぬ。いかなる罪も悪も、そこには届かない。

おのれひとりの業は必ず尽きることがある。しかし、人間の業はいつまでも受け継がれて尽きることがない。人類が減ばぬかぎり。

忘れることなくして、思い出すこともない。人は、いつも、何ものかを忘れていつている。人は、多くのものを、忘却の淵に投げ捨てていつている。われわれは大忘却から生まれ、大忘却へと消える。

宗教は芸術の源泉である。宗教的儀式そのものが芸術作品である。宗教は抽象的コスモロジーを象徴によって表現する。

いかなる宗教もシンクレティズムによって成り立っている。混交せず、重層化していない宗教などない。宗教混交は、もちろん、日本だけではない。ヨーロッパのキリスト教だって、中近東のイスラムだって、混交し、重層化している。

古代イスラエル人は砂漠の民であり、その奉じた一神教は砂漠の風土が生み出した宗教だと言われる。しかし、古代世界で、中近東の砂漠地帯を往来していた遊牧民と言っても、イスラエル人だけではない。しかも、中近東の古代世界では、イスラエル人以外は、ほとんどが多神教を奉じている。なにゆえに、イスラエル人だけが一神教を作り出したのかは、

その砂漠的風土だけでは十分に説明することができない。

いかかわしい新新宗教などを見ると、「宗教は阿片だ」というのも、一面の真理を突いている。

宗教は癒しではない。人間の苦相を見よ。罪、悪を見よ。

## 人間について

人間、世界の中にあって世界を問う者。

人間は、人間でありつつ自らを問う者である。

人間の思考には限界がある。

人間は物質を観念化し、観念を物質化する。物に意味をもたせ、意味を物に表わす。

物は、人と人を媒介する。

人間は、自己外化において、そのものである。「私は——である」というときの述語において、私は自己外化しており、この述語において、私は私である。

人間は仮面をかぶる。

肯定的なものは、みな、虚偽を含んでいる。

真実らしい嘘が好まれる世界。それが人間世界である。

この世の中から虚偽というものを除いてしまったなら、世の中は、砂漠のように空しいものになってしまうであろう。われわれの日常生活から政治や宗教に至るまで、ほとんど虚偽によって成り立っている。

真実の裏には虚偽がある。

人は虚偽を欲する。

この世は詐欺で成り立っている。政治も詐欺だ。宗教も詐欺だ。広告も詐欺だ。詐欺は、詐欺の自覚がなく、自分自身が騙されているとき、もつとも大きな詐欺が行なわれる。人間は騙されたい動物である。幻想なくして生きていけない動物。人間。

存在そのものが詐欺である。

人間は騙されまいと思いつながら、騙されたいと思う。手品師はこれを利用する。神も、また、そのような手品師なのかもしれない。

秘密は暴かれてはならない。暴かれれば、秘密はもはや秘密ではなくなる。手品の種明かしのように。

人間はフィクションを追う動物である。恋愛、文学、アイドル、スター。考えてみれば、映画も単なるスクリーン（幕）にすぎない。

すべては虚構である。しかし、虚構なくして、人間はありえない。

人間は幻想を追う動物である。ゲームから演劇に至るまで。

虚構のみが事実である。そして、事実は虚構にすぎない。

存在そのものが虚構である。

われわれは、フィクションの中で生きている。会社も国家も存在しない。会社は、社員、社長、株主などの関係としてのみある。国家も、国民、政治家、元首などの関係としてのみある。一般に、ものは、部分と部分の関係としてのみある。われわれは、目に見えない「関係」というフィクションの中で生きている。

人間は、幻想なくして生きていけない動物である。

貨幣は、皆が価値があると思っっているものが貨幣になる。貨幣も、幻想によって成り立っている。幻想がなくなれば、何の価値もなくなる。ただの紙切れ、石ころにすぎなくなる。経済も仮想現実によって成り立っている。

人間は、イドラとドグマによって生きている。人間が古今東西において懐いてきた様々の観念は、すべて幻想である。

人は、いつも幻想を見たいのである。現実を見たくはないのである。

一切は虚構である。虚構のみが真実である。

この世のことも、あの世のことも、すべて虚構である。虚構の中に虚構があるような世界である。

人間は、時と場合によって、服装や態度や表情を変える。それは、人間が対他的存在だということ、関係においてある存在ということを表わす。人間の実は、関係とは別に存在しない。

制服、これは、人間という自己疎外的存在の象徴である。

人間は、その着ている衣服とおりの人間になる。人が衣服に合う。

ちようと蛇が皮を脱いで大きくなっていくように、人の子は、衣服を脱ぎ捨てて大きくなっていく。

服装が変わることによって、人間が変わる。

衣装は、現わすとともに隠し、隠すとともに現わす。衣装の魅力はそこにある。衣装は、内と外、表と裏の中間にあつて、その媒介項である。

裸の王様を裸と言つてなぜ悪いのだろう。裸の王様を裸と言うと、人は腹を立てる。裸の王様の衣装を賛嘆する大人達と同じように、人は虚飾と巧言を好む。

私は裸の王様を裸と言う。人はそれを嫌う。

過去から現在へ、人間社会における人間の姿。それは、まるで仮装行列のようだ。仮装、しかし、それ以外に人間の真の姿はない。

善を装う悪。弱者を装う強者。

自分達だけがいい子になるために、他を悪く言い、他にレッテルを貼る。否、時に魔女にする。これを、偽善という。

いつも人はいい子になりたい。イデオロギーはそのためにある。イデオロギーのためには、歴史さえ捏造される。

いつの時代にも、パリサイの徒はいた。人は、みな、いい子になりたい。

善という女のすぐ後ろには、いつも、悪というヒモが手ぐすね引いて待ち構えている。

過去を悪とし、現在のおのれを善とする。おのれの中に果食う罪を認めない。そのいかかわしき。現代の魔女狩り。偽善。

人々は、皆、自らの悪から目を背け、きれいごとを言う。そして、悪はどこか他の中にあるとして、これを糾弾してやまない。そうすれば、善人になれるのだ。魔女狩りの心理。自らの中に果食う悪を見るか見ないか。

自らの悪を見ずに、他の悪をあげつらう。そのことによって、道徳的に高揚した気分になる。それが善であり、正義であると考える。偽善。

過去を断罪し、自分たちだけがいい子になる偽善者達。自己が善であるには、どこかに悪がなければならぬ。自己正当化、それが、偽善者の心理である。

悪を制御することは難しいが、善を制御することはもっと難しい。皆が正義を振りかざし、善と思っているからである。

倫理は相手を攻撃するための道具である。自己に課される義務とは、人は思っていない。

現代に罪なき者はいない。罪に問われない罪。それが問題だ。

豊かな生活を無限に追求していたわれわれの罪は、積もり積もってどこかに蓄積される。その蓄積された罪を悪として糾弾すれば、われわれは善人になれる。自らの罪は忘れて。現代の魔女狩り。蛇が蛇を呑み込んでいる。自己言及としての文明の罪。

最も悪いことは善人が多すぎることである。善人の振りかざす正義ほど始末の悪いものはない。

善にこそ悪は宿る。

人間の本性は悪である。もしそうでないなら、どうしても偽善がはびこるのか分らない。

実悪は罰せられる。しかし、偽善は罰せられない。

人間、その象徴をつくる者。

人は意味において生きる。

言葉は道具ではない。言葉は場所である。

弁論術は、言葉に、人を動かす大きな力を認める。人間は、言葉によって、どんなところへでも動かされる。

言葉は、人間が人間であるための場所である。

真理は、語られたとき、騙られる。言葉は、語られるとともに、騙られる。だが、これ自身言葉である。語られているとともに騙られている。ただ、沈黙あるのみ。沈黙、しかし、これも言葉である。

言葉は、常に、実体から懸け離れる。それは、言葉が生れたときから始まる。

敬語。目上の者や目下の者を敬遠したり、軽蔑したりするときに使う言葉。

人間の作ったもので、不思議でないものはない。しかも、それらは滑稽でさえある。旧石器時代の棍棒ひとつとっても、不思議で滑稽だ。人間はなぜこのようなものを作るのか。人間は、このような自己の外化態を通して世界を知り、自己を知る。それを、一歩退いて見ると、人間は全く滑稽なものを発明するものだと思うのだ。

愚かで滑稽なことをする動物。人間。

人間のすること、なすことは、すべて滑稽である。

人間は不思議なことをする動物である。

人間は、葬式をする動物である。

人間は、二足歩行を完成して以来、余暇をもった。その余暇から文化が生まれる。だから、人間はいつも余分のことをする。料理、装飾、競技、演奏、儀式、旅行、要するに遊びをする。人間は遊んでいるのである。

人間のやることは、すべて、退屈をまぎらわす遊びからくる。

儀式を行なう動物。人間。

祭りとは歴史。祭りは過去への復帰であり、過去への振り返りである。

祭り。日常性からの離脱。これなくして、日常性はいりえない。始原への回帰。それが現在を成り立たせている。

人間は遊ぶという点において、神の似姿である。

人間が自分自身をホモ・サピエンスと規定して以来、人々は自分達を「知恵ある者」と思い続けてきた。何と愚かしいことであろう。考えてみれば、それは「自称」にすぎなかったのだ。

人間が、こぞって人間尊重、人間の尊厳を叫ぶとき、すでに、人間は滅びへの道を歩み出している。

魔がさしたという。自分の意志ではなく、超人間的なものの誘惑。人間は超人間的なものによって動かされている。

情状酌量というものがある。合理的法によって悪と判断されるものも、自然な感情からいと許される。たとえ悪であっても、自然から出てきたものは憎まれぬ。善・悪の判断基準は、自然・不自然にあるのではないか。

地を這う虫には、空を飛ぶ鳥の世界は見えない。

愚かな賢人と賢い愚人。愚かな者ほど賢く、賢い者ほど愚かである。

井の中の蛙は幸いである。

こう言って欲しいことがこう言われていけば、人は理解する。こう言って欲しいことがこう言われていなければ、人は理解しない。理解とは願望である。そして、理解とは、大概、誤解のことである。

「私は命をかけてもやり通す」と言うとき、人は大概、命に危険のないことを見越している。

真に自由な個人として自立するということは、孤独になるということである。人は、そういう個人になることを欲しない。また、恐れる。

場所柄に合ったしかたで、その場に取まっているとき、人は見よいが、場所柄を弁えずに割り込んでくるときは、醜い。

自己とは、ネットワークの結節点である。ここでは、自己は他者である。

私は、人間のすること、なすこと、すべてが奇妙で、不思議なものだと思っている。ときに、滑稽とさえ思っている。

私は、人間の為すこと、言うことの虚偽性を見てきた。人の為すことは偽である。

人間とは、なんと、ばかげたものであることか。

人間の行動を晒し、嘆き、呪詛する。理解せんために。

見まい、聞くまい、言うまい。読むまい、書くまい、話すまい。人間的な、あまりにも人間的なものへの嫌悪。

ああ、軽薄の徒と交わるなかれ。

私は、多くの変節を見てきた。人は、今日と明日では全く違った考えを言い出し、右へ左へと、何の臆面もなく身を翻していく。

要領のいい奴らの世の中。

世間虚仮。実に、われわれは、虚仮不実の身である。

男は人の法を司り、女は地の法を司り、ふたつの法は、しばしば対立する。だから、両者を融和するものとして、天の法がなければならぬ。

われわれは錯覚によって生きている。なにしろ、今でもなお、日頃は、われわれは、太陽が地球のまわりを回っていると錯覚しているくらいだから。錯覚なくして生きていけない動物。人間。

結婚から詐欺商法まで、人の世は錯覚によって成り立っている。政治や経済も。

人間の世は錯覚によって成り立っている。政治、革命、経済、商売、広告、宣伝、そして、歴史認識。

人々は掛け声が好きだから、倫理訓を好む。それでいて、人はそれをほとんど守らない。守れない業をかかえているのだと指摘すると、人は嫌な顔をする。指摘されたくないのがある。倫理訓、それは業からの逃避である。

「人間は他の動物より賢い」と思っている動物は、人間だけである。

自己を語ることは、自己を騙ることである。自己をだますことができる者が、他をだますことができる。語ることは、他をだますだけでなく、自己をもだます。

幻想さえ流布しさえすれば、金も入るし、人も集まり、本も売れる。人気も博すことができる。革命さえ起こせる。リアルな認識、これが最も売れない。

人間はもともといかがわしい存在である。人類誕生以来、幻想を振り撒いて商売してきた呪術師がひっきりなしに登場してきた。人間は幻想なくして生きていけない動物である。

きれいごとを叫ぶがよい。誰もが「おお、そうだ」と言うだろう。誰も反対しないだろう。否、誰も反対できないだろう。しかも、誰ひとり守るものはいないだろう。実行する者もいないだろう。ああ、偽善の世。

われわれ人類はいかがわしいことをしてきた。旧石器時代の呪術師以来。

独裁者は自らの影に怯える。

## 現代批判

現代文明は、捕まえることのできない巨大な怪物である。それは、自分でもどうすることもできないくらいに膨張しすぎてしまった。われわれは、その腹の中にいる。現代文明は、膨張しすぎたことによって滅ぶであろう。

安上がり膨張には限界がある。風船と同じ。

現代文明は、確かに、一個の風船玉のように、膨張に膨張を重ねてきた。しかし、それは、突如として破裂するものではない。ローマは一日にして成らなかつたように、一日にして滅びもしなかつた。徐々に衰退していったのである。おそらく、現代文明もそうであろう。

間違つた空間。現代の空間。都市の空間。幾百万という敵に囲まれ、暗闇の中をさ迷う兵士のように、真の空間を求める。

沈黙の喪失。闇の喪失。饒舌の時代。現代。

様々のスローガンが叫ばれる。叫びの時代。現代。

宇宙ロケットが飛ぶ時代にこそ、迷信は流行する。

仏教の読経と現代音楽が同居する。何か新しいものが生み出されるのだろうか。

現代では、種々雑多な思想や行動様式が何の連関もなく押し寄せ、恐ろしいほどの勢いで

普及していく。しかし、流行するものはすぐに廃れる。

なんとおびただしい数の本の山であることか。それは、私にとって恐怖である。

今日の出版物の大量生産は、ただ、大量消費されることによって金が集まればよいだけである。字や画像の詰まった紙を売っているに過ぎない。

思想の大量生産と大量消費。思想の商品化。

十九世紀以来、思想は、ある意味で過剰に生産されてきた。しかし、それらを支える世界が散乱してしまっていた。

東京砂漠には、東京芸者が乱舞する。

安っぽい予言のはびこり。未来への逃避。人は絶望しない。どこまでも希望をもつ。絶望的世だから。

現代は〔巨大〕の時代である。その分、人間は矮小化する。

ベストセラ―。すぐに忘れ去られる本。

休みなき時代。現代。

現代は安上がりの時代だから、安上がりの饒舌家達が、安上がりの言論をとめどなくしゃべってまわり、もてはやされる。饒舌の時代。

現代では、まともな思想は、大概黙殺される。

今日の生命科学の生命操作も、ナチスの人種改良と変わらぬことをやっている。

騒音の時代。現代。

不易流行という。だが、今日の世界では、不易なもの流行せず、流行するものは不易ではない。

瞬間瞬間の刹那的刺激。スポーツ・映画・テレビなどが作り出す人気者への過大な評価。そして、文化、芸術、思想の衰退。

わが国の図書館を見よ。そこには、幾百万となき書籍が死蔵されている。知識の膨大化。知識の重荷。歴史の重荷。

技術の進歩は、人間に不幸をもたらす。

原子力、宇宙開発、生命科学。巨大科学の行方。ひとつの閉鎖系。癌細胞。行き着くところまで行く。滅ぶまでは。

異常が正常化し、正常が異常化する時代。現代。

二十一世紀は、墮落と衰退と無気力と不安の時代となろう。

今日かまびすしくもてはやされているもので、残るものはなにもないであろう。二十世紀

にも、十九世紀にも様々なことが叫ばれ、教養俗物がわが世の春を謳歌していた。しかし、なに一つ残らなかった。すべては流行にすぎなかったからである。

ホテルなどで、日本語で書かれた表記の下に、英語、ハングル、中国語の表記が書かれている。このようなところにも、私は世界史の現在を見る。諸文明の混合、文化の混在。

現代人は現代のバベルの塔を築いてきた。罰を受けることなくして、悔い改めることはないであろう。

現代は、多種多様な世界観がそれぞれの対話なしに並存し、分裂している。しかし、現代の諸思想の分裂は統一されることはないであろう。

まるで、テレビのコマーシャルのようだ。ほんの一秒か二秒で人を惹きつけてしまおうとするかのように、今日の本は売られる。刹那的でセンチシヨナル。

現代。言葉の破壊。言葉の消費。言葉の略奪。断片語と騒音語の氾濫。ただ、沈黙するのみ。

遺伝子操作は行き着くところまで行き着くであろう。倫理や法で規制しても、必ずそれを破る者が出てくる。

環境共生的文明の構築をと言う。これも幻想なのかもしれない。相変わらず膨張文明は続く。

この世は実に雑音に満ちている。

長く退屈で弛緩した時代が続くであろう。

臓器移植、この文明という名の野蠻。もともと、文明は野蠻なものであった。

現代では、退屈も多忙も、どちらも高貴な文化を生みださない。

現代では絶えず危機が叫ばれる。現代人は不安によって生きているのである。現代人は、そこで自足できる世界を失ったのである。

現代世界史のひとつの特徴。文化の混在。これは、風俗、社交、衣装に至るまで、あらゆるところに見られる。そこから創造されるものは、それほど多くはないであろう。

どうして人間の生殖細胞だけが操作されてはならず、他は操作してよいのか。これこそ人間中心主義。

自然の破壊と人は思っているが、実は人間の破壊。

現代は病んでいる。もしそうだと思わないなら、それが病いの証拠。

仁義が廃れたとき、仁義が叫ばれる。

現代人は、「森を大切に」と、コンクリートの森の中で叫んでいる。

デカルトの懐疑する人間、バスキルの考える人間。ところが、現代では、反応人間が登場している。叫びとオウム返し。

今日、私にとつて、軋轢とは、低劣なものによる軋轢であり、権威による軋轢ではない。

かくも低劣なものがもてはやされる時代もなかった。低劣な者が低劣なものをつくり、それを、低劣な者が消費する。

かくも低劣なものの蔓延する時代に、どうして、このようにして絶えず逼塞していなければならぬのか。

多分、ここ数百年の間は、精神的に不毛な時代が続くであろう。

大廈の傾倒一木の支えるところにあらず。

ニーチエの時代には、まだ預言が可能であった。現代は、すでに預言が不可能である。

現代、無明の世界、これは、もはやいかなる力によつても救うことはできない。ただ、わずかに工夫できることは、いかに耐えるかだけである。

どうして、こうも、まともなものが受け入れられず、くだらないものばかりがもてはやされるのか。

低劣なものが賞賛され、高貴なものが認められない時代。現代。

現代は、欲望の大洪水の時代である。その溢れ出る水は、岸を超え、野に溢れ、人家を呑みこみ、山をも崩していく。そこで、ひとり、岸辺の一本の草にすがってみたところ、何にならう。もはや、方舟さえ作つても遅い。

土台の崩されているときに、二階にしようか、三階にしようかと、議論している。

低劣なものと戦ってはならない。争ってはならない。それは、自らを滅ぼすからである。

かつてのレクラム教団のように、現代では、ただ逃避する者のみが、その（美しき魂）を守ることができる。

私は現代を認めない。

教養の死。

現代でもっとも頹落しているものは、マスコミ、出版界であろう。

現代では、あらゆる無関連なものによって、魂が寸断されていく。

精神の秩序の崩壊した現代。人は、それに対して、何の罪の意識ももたない。それどころか、人びとの多くは、崩壊を助長し、推進している。むしろ、この精神の秩序の崩壊の苦痛と罪は、現代の自閉症患者や分裂病患者に背負わされているように思える。自閉症患者は自己の純粹持続を守ることによって、分裂病患者は自己の統合を犠牲にして。私は、わずかに、罪を自覚することによって持ち堪えている。

現代が罰せられるときは必ずある。現代人はあまりにも増長しすぎた。それは、現代人の作った罪である。現代人は何かを忘れてきた。人間が人間を超えるものを忘れるとき、人間は罰せられる。

精神的育ちの悪さ。現代では、それが、かえって権利になる。教養俗物達。

現代。精神の砂漠。非真理の世界。真理の生きる場がない。

現代。人々は、先を争って真理から遠ざかっている。真理の忘却、つまり、人間を超えるものの忘却。真理は、人間のうちから出るのではなく、人間を包み超える世界から出てくる。

根源的なものへの志向、それが、すでに根こそぎ絶やされてしまっている。芽が出ることも、花が咲くこともないだろう。たとえあっても、空しく掻き消されて行くだけである。

呪うべき神もなく、争うべき神もない。

実に、不愉快な時代。

私は現代を批判してきた。私自身、その中にいる者として。

われわれは、根本的にダメな時代に生きている。

狂気と死。持続なき世界にあつて、純粹持続は、わずかに、この世界にのみ、自らの隠れ家をつけたようにみえる。

テロは二十一世紀型の新しい戦争の形態。戦争の形態は常に変わる。二十世紀型の世界戦争や限定戦争だけを戦争と思っていると見誤る。不安な時代。

七十年、世情は急速に軽薄化してきた。幻想を振り撒いて人を欺き、人気を博す人物がどれほど登場してきたことか。私ひとり嘆き恨んで何になろう。

アフリカの未開社会に王殺しの風習があつた。それは一種の社会的精神衛生であつた。と

すれば、それは現代の民主主義社会にもある。民主主義社会は、むしろ、これを容易にする。

未開社会では、衣服を着ることが文明であった。文明社会では、衣服を脱ぐことが文明である。

## 大衆社会批判

新聞は、弱い権力には強く、強い権力には諂う。

大衆は、自ら願望するものしか理解しない。

凡庸なものが絶対の権力を握っている時代。現代。

所詮、明日は離散する烏合の衆が今日集合している。大衆化の時代。

富が集中したとき、文化は興隆する。富が分散したとき、文化は頹落する。大衆化時代の文化。

どんなに高貴なものでも、受け取るものが低俗であれば、それは低俗にしか理解されない。

流行、ブーム、一定方向に醸し出され、逆らえぬ雰囲気、時勢。マスコミや大衆は、そのつど、それに迎合していく。そして、マスコミも大衆も、その結果には責任をもたない。誰も責任をもたない。

本当らしいことを言うことだ。そうすれば、大衆がよることだ。

下り坂では下りる者が得をする。文化も同じことだ。

大衆社会の文化。遺産の食い潰し。

愚か者が、皆、賢くなったと思いついでいる時代。現代。

大衆は液体動物である。その時代、その時代の流行の思潮を口にして生きていく。

君が嘘を語れば、大衆から愛され、礼賛されるであろう。

大衆化時代、それは品位の喪失の時代である。書かれるものも、演じられるものも。

大衆化時代に大衆の支持を得る手っ取り早い手段は、センチメンタリズムとスキヤンダリズムとセンチショナリズムに訴えることである。大衆化時代の文化。

「われわれは主體的にもものを考え、主體的な意見をもたねばならない」という報道人や教育者や知識人の言葉に惑わされて、大衆は、「そうだ、主體性をもたねばならない」と、オウム返しに言う。実に主體性のない話である。「主體的にももの考えよう」、これは、大衆には過酷な重荷であった。

大衆は御しやすい、御しにくい。大衆操作は容易であり、容易でない。

もしも、私が虚偽を語るなら、大衆から愛されるであろう。

大衆は真実らしい虚偽を好む。そして、それを叫ぶ男または女についていく。

貧乏人は、大金が入ると、どうしてよいか分からなくなる。それで、ひとまず、それを銀行に預ける。近代は、大衆に、もともと背負い切れぬ（主体性）という大金を与えたから、大衆は主体性を預ける銀行を探した。ナチズム、共産主義、新宗教、それらは、主体性を預かる銀行だったが、前の二銀行は破綻した。預けた大金も返ってこなかった。新宗教はどうだろう。

時代に迎合する贗預言者達のはびこり。彼らは、それゆえに、大衆から支持され、国家から賞賛される。

現代の底なしの大衆化時代に、思想心情の品位を守ろうとするなら、ボードレールの言うように、実に「憂鬱」という苦悩を代償としなければならぬ。

真実を語ることなかれ。嘘を語れ。そうすれば、大衆が喜ぶであろう。

哲学者ども。そのいかがわしさ。純潔本能は、それを見抜く。

真実を語る者は孤独である。虚偽を語る者は多くの支持者をもつ。

もしも、私が虚偽を語るなら、神から憎まれるであろう。

もしも、私が真実を語るなら、大衆から憎まれるであろう。

くだらない人物が、ちようど芸能界のアイドルのように、大衆の偶像として登場してくるのが現代社会である。

すべてが消費されていく。そして、消耗品を作る者のみかもてはやされる。

大衆時代の政治を、私は信用しない。

現代の支配者、大衆は、高貴なものを押し退けてやまぬ。

現代、この大衆化時代、ここでは、大衆が、まるで癌細胞のように、あらゆるところへ侵入してくる。例えば、新聞広告を見よ。

昔なら、丁稚か子守をしていればよい者が、今では、大学にわんさと推しかけてきている。そこには、もはや精神的秩序というものが無い。

有名、つまり、大量媒体に乗るということ。大衆化時代の指標。文化の低落。

今日の時代は大衆化の時代だから、何ほどかのことを言うにも、自らをおとしめて言はねばならない。だから、はじめから低俗なもののみが流行する。

現代のどうにもならぬ病はあらゆる面における大衆化現象である。識者は、こぞつて、このことを忘れている。

大衆の言つて欲しそうなことを言う者が賢者の顔をして登場してくる世の中。

大衆はそれでも減ぶことはない。どんなことがあつても減ぶことはない。鵝鴨は飽いて喉膝たり。

マスコミ。現代の病。

活版印刷の発明以来、人間はだめになった。

くだらないものもてはやされ、要領のいい道化が巾をきかす時代。

ああ、何と(頭のいい)人達よ。まさに、今日は、あなたがたの天下である。

今日の文明が再生するには、大地震か大洪水でも起きる以外にないであろう。大自然の鉄槌しか、頹落した文明を自覚することはできぬ。しかし、大衆は、それでも生きのびる。彼らは、荒野と廢墟と化したところからでも、生活を始める。ちょうどあのノアのように。ノアは、もしかしたら、ただ生きのびることしか頭になかった男だったのかもしれない。考古学的終末においてなお永遠であるものは、大衆である。

明治以来、わが国は、時代的に何度となく大きく転換してきたが、文化の低落、大衆化という点では、一貫して変わっていない。それは、坂道をころげ落ちるように、加速度的に進行していった。近代化とともに、成金や俗物がのしあがってきたのである。それは、日露戦争以後、大正デモクラシーにおいて、相当程度進んで行く。その後の昭和前期と後期でも、時代は大きく転換したようにみえるが、文化的野蠻の横行という点では、何ひとつ変わっていない。高度な文化感覚は死んだのだ。近代化の時代、それは、高貴な精神の敗北の時代であった。

古代ローマの終末期、アウグステイヌスのいた北アフリカのヒッポの教会のまわりには、すでに蛮族が押し寄せて来ていた。アウグステイヌスは、この地上の国の滅亡を確信するとともに、それでも、神の国への希望を失わなかった。今日、わが国の大学にも、真理への愛を喪失してしまった大衆が押し寄せて来ている。否、この蛮族は、それを略奪しようとして押し寄せて来ている。ここには、もはや真理の国への希望さえない。アウグステイヌスのように、希望を失わないことができるだろうか。

今日、出版界の編集者達も大衆化の大波にさらわれて、高貴な文化感覚を失っている。そのため、まともなものは残らない。低俗な出版物の大洪水。

大衆に取り囲まれた牢獄。

編集者という者は、現在只今有名であれば、つまらぬ文章でも、ちやほやする。

悪貨は良貨を駆逐する。雑草は花園にはびこる。

実に、現代は、書くべからざる者が書く、そういう時代である。

イデオロギーの叫びに代わって、大衆達の無意味な嬌声とつぶやきが、象牙の塔に押し寄せてきた。そして、真理の塔は倒壊した。これが、今日の大学の現状である。

本来、文字は神聖なものであった。だから、かつては、貴重なもの、価値あるもののみを、文字に記した。しかし、印刷術の発明以来、くだらないもの、低俗なものまで、大量の出版物になって生産され、大量消費されるようになった。かくて、大衆小説家や俗流評論家が巾をきかすことになった。私は、今なお、つまらぬことを文字にすることに對して、精神的禁止命令を受ける。

くだらぬ奴らがもてはやされ、いかにも一流のような顔をしている時代。実に、現代は凡庸の勝利の時代である。齷齪、能く堂に至る。

真理に対する敬虔さ。真理の塔に攀じ登る精神。現代の大衆は、それを失っている。それどころか、真理の場に破壊的に侵入し、それを引き下げ、略奪しようとする。もつと悪いことには、そういう大衆におもね、取り入る者が大量に出てきて、賞賛されることである。真理の国は滅んだ。近代教育は間違っていた。

皆が同じであることを確認するために、大衆は集まりたがる。要するに、そこに、集まれ

る標識があればよい。そこからは、どれほどのことも生れはしないだろう。

大衆が大衆を導き、大衆が大衆に媚び、大衆が大衆についていく時代。大衆専制社会。

心貧しき者は幸いである。

大衆に迎合し、これを煽動する知識人達。偽予言者の横行。もはや預言は不可能である。

今日の人文科学の世界では、まるで重箱の隅をつつくような議論がなされている。そのような論文が、学問的で実証的で抑制の効いた優れた業績だと言われる。そして、それ以外の大局に立った論は先人の業績を踏まえていない抑制のないくだらない業績だと言われる。そのようなところからは、偉大な思想家も歴史家も出てはこないであろう。凡庸の勝利。

凡庸の専制のもとでは、偉大なものが圧殺される。偉大なものの喪失。文化の崩壊。

猫がいなくなれば、鼠はわがもの顔に走り回る。鷹がいなくなれば、雀は気ままに飛び回る。

通俗的な歌は流行するが、高尚典雅な歌は流行しない。

知識人も大衆も日増しに軽薄になり、衰弱してゆく。出版界でも、高貴な歌はもはや聞かれず、低俗な歌のみが溢れている。この終末の時代、この崩壊の時代を誰が支えることができるか。

## 知識人について

転向、左から右へ、いとも簡単に転向してきた知識人のなんと多いことか。彼らは、節操というものをもちたない。思想への責任をもちたない。そして、あるることか、われわれに向かって説教を始める。しかも、そのことよって、また、大衆の人気を勝ち取る。私は訊きたい。あなたは以前にどう言ってきたのかと。

言論は流行歌である。そのときそのときの流行歌手が出てくる。それは人気商売であって、客受けを気にする。

危機を売り物にする小売商人達。絶えず危機を叫んでいる狼少年達。偽善は滅ばず。

かつてマルクス主義に走った連中には、大学教授の息子だとか、造り酒屋の息子だとか、資産家の息子だとか、恵まれた階級の者が多かったものだ。彼らは働かなくてよかった。労働しなくてよかった。余裕があった。時間的にも、金銭的にも。

現代の賢人。実に、大衆化時代の賢人。

現代の賢人は強欲だ。精神のみならず、パンまでも要求する。

大気汚染物質を大量に撒き散らしながら飛ぶ大型ジェット機に乗って、地球環境の危機を説いて歩く学者やジャーナリストの矛盾。

環境論者達。地球環境を守ろうと言いながら、排気ガスを大量に出す飛行機で飛び回る人達。知行の不一致。この不一致を自覚しないから、きれいごとが言えるのだ。見事に偽善者になれる。実は誰もが不一致なのだ。知行の不一致を自覚するかしないか、このちよつとした差が、ソクラテスの無知の自覚同様、大事なのだ。偽善者になるかならないかが決まる。

幻想や願望を売る小売商人達。いつの時代も三文説教師はいた。しかし、消えた。

行為が伴わなければ、叫ぶことは容易。

戦時には、絶えず和平の道を探ること。平時には、国の守りを怠らぬこと。ところが、あの平和主義者達は、戦争中には、あろうことか、そのお先棒を担ぎ、平和になつてから平和を叫びだした。これを迎合という。阿世。

学者の特技。ほおかむり。

東西いずれの文化にも責任をもたぬ奇妙な人種、そういう知識人が、明治以後、なんとほおかむりしてきたことか。

時代の変化とともに言論を要領よく変えていく知識人のなんと多いことか。彼らは、要するに芸人なのである。世の中が言つて欲しいと思うセリフを言う芸人なのである。地震計。拡声器。プラトンは、そういうソフィストを、『ゴルギアス』のなかで、ほとんど怒りに近い調子で批判している。しかし、時代は、そういうおもねる芸人をもてはやす。

知行が合一しているのを哲人と言ひ。知行が一致していないのを山師と言ひ。しかし、哲人と山師は区別がつかない。山師はいつも哲人の衣を着て登場するからである。そして、山師は大衆の喝采を浴びる。現代は山師の時代。大衆受けの時代。哲人の登場することはないであらう。

移り気な鳥が枝から枝へ飛び移るように、わが国の知識人は思想を変えてきた。しかし、自分の都合のいいように、時代の変化に合わせて、その場その場で思想を変えていくのは、思想ではない。思想には、責任というものがある。

自然破壊的文明の中にいて自然保護を叫ぶ矛盾。

知識人。この知行不一致者。

現代の知識人、評論家、これ皆芸者、タレント。

幻想を売る小売商人ども。

当世の字者を見るに、彼らは、ただ言葉の吟味にのみ励んで年月を過ごしている。だから、事柄の本質について尋ねると、もう形無しである。

学者はことさらに文言にこだわり、言葉のみをたよりに真理を知ろうとして、日夜、魂をすり減らしている。しかし、真理は、字面のみを追ってでは分からない。

今日人気の「宗教学者」や「哲学者」は言葉巧みに大衆をまるめこめ、しかも、自ら立派な「賢人」という顔をしている。ああ、これを墮落と言わずして、何と言おう。

## 近代について

近代になって地動説が登場し、人間中心の時代が始まったという。本当だろうか。地動説の登場以来、人間は不安定化し、定点が定まらなくなったのではないか。なにしろ、大地が動き出したのである。

ルネサンスの自然科学の興隆と十九世紀以後のそれとの違い。前者には有機的世界があったが、後者にはそれがない。

西洋の哲学史を一瞥するに、それは、どこまでも歴史に垂直に、いつも永遠に向かっていった。だが、現代では、それが崩壊してしまっている。

神を失ったヨーロッパ人は、一家の主人を失って露頭に迷った寡婦のようなものだ。

ダンテやセルバンテスやシェークスピア、これらは西洋近代文学の出発点ではなく、西洋中世文学の最後の開花だったのだ。ここでは、登場人物も作者も、自己を超える大いなるものに包まれている。

ガリレオがピサの斜塔で物体の落下実験をしたときから、近代は始まったという。確かに、近代は、人間の落下の時代でもあった。近代の人間は、最初から、落下すべく傾いていたのである。ピサの斜塔が傾いていたのは象徴的である。

近代の人間は、神を押し退けて、その王座に自分自身を据えた。しかし、それゆえにこそ、人間は、神のように孤独になった。自らをホモ・サピエンス、知恵ある人間としたところで、自己満足にすぎない。神の大いさを知っていた中世の人間は、自らの愚かさを知っていたがゆえに、近代の人間より賢かった。

聖なるものを地上に引き降ろしてはならない。地上的なものを聖なるものに祭り上げてもならない。しかし、聖なるものと地上的なものとは切り離せない。

科学的合理主義に支配された近代においては、かえって、抑圧された非合理なものが噴出してくる。魔術的予言の流行。近代は、これをひとつの形式にまで昇華しえなかった。理性との調和的統一を図れなかった。分裂の時代。

進歩の観念の蔓延。近代特有の病。近代人は信じるべき何ものかを失ったがゆえに、未来への進歩を信じるに至った。そして、次々と夢を追っていった。青い鳥のように。

ポスト・モダニズム。これとして近代の延長にすぎない。近代の末期。そこからは、何ものも生み出されないのであろう。

くだらないものが著作権を主張する時代。近代。近代の病。

文化は、本来、人間を超えるものとの関係において成立した。ところが、近代はこれを人間化した。そのため、文化は頹落した。

### 時代をみる眼

時代の反映にすぎないものは、時代とともに滅ぶ。

ひとつの時代を象徴する者は、必ずしもその時代において主流を占めていたわけではない。特に近代においては、時代の批判者であった者、例外者であった者が、後の時代になって、その時代を代表することがしばしばある。批判の中に、逆説的に時代が反映するのである。

時代に受け入れられた者は、時代とともに消え去る。

いつの時代にも、その時代に応じたありあわせの正義があり、繰り返し叫ばれる。それは、時と場合によって変わり、なんの一貫性もない。しかし、その正義に乗っていった者は大きな力を得る。

御時世がそうだから、人はそう言う。

いつの時代にも、時代に迎合して、自分の意見をころころと変えていく者がいる。それどころか、いつも、それを先取りしていく者がいる。

人はみな時代の子であり、時代を踊る者だから、時代を知る者はいない。

時代とともに生きる者は幸いである。

無節操、変節、転向。時代の変化とともに、要領よく自らの言論を変えてきた徒のなんと多いことか。

人々は、いつまでも淡い夢を見ていたのだ。そして、淡い夢を見せてくれる者のみが流行する。誰ひとり、危機を認識しない。

自由思想家の代わりに、偽予言者。

文化というものは、時代の産物であり、環境の反映である。よい畑に育った作物は大きく育つように、よい時代に登場した人物は大らかにその素質を伸ばし、大きく発展する。逆に、悪い畑に育った作物はいじけてしまうように、悪い時代に登場した人物はその素質を伸ばすことができず、育たない。

文化の興隆期には、あらゆる分野から偉大な人物が登場してくるが、反対に、その衰退期には、あらゆる分野からくだらぬ人物がでてくる。

天才は、単なる個人的能力によってのみ生まれてくるのではない。天才を生み出す時代のエネルギーのいかに大きいことか。時代のエネルギーが衰弱したところでは、せっかくの天才も委縮してしまう。世に悲劇の天才というものが存在するのは、そのことによる。

これほど精神を疲弊させる時代もない。

その時代に生まれ合わずことなく、その土地に住むこともなければ、その時代や土地は美

しい絵のようにみえる。しかし、その時代に生まれ合わせ、その土地に住まねばならなくなれば、その時代や土地は出来ない絵のようにもみえる。

血を洗うに血をもつてするように、時代と戦わねばならないときがあるが、しかし、時代の戦いに刀折れ、矢尽きるときもある。

弱者が強者になり、強者が弱者になる時代。

持続を失った時代。もうすでに、私自身のうちで、精神が持続しない。

顛落した時代には、顛落した人間どもが出てくる。

私は時代を拒否し、時代は私を拒否する。

現在は耐え難い。過去は重荷である。未来は空無である。

時代に対して、生れてくるのが早すぎるのも、遅すぎるのも、悲劇的であり、不幸である。

崩壊の時代に、崩壊を踊る者は幸いである。

長く、退屈で、不安で、苛立たしく、正統も異端もない、顛落した時代が続く。終末への道は長すぎるほど長い。

鬼神さえも沈黙している。鬼神と契約することさえできぬ。

昔は賢人を尊んだ。今は愚人をもてはやす。否、愚人が賢人の顔をして登場してくる。

過去何千年もろくなことはなかったのに、どうして、急に、すばらしい時代が訪れようか。政治も、宗教も、科学も、商業広告も、皆、幻想を売っている。詐欺である。

いつの時代も、人間は頹落してきた。

どんなに崩壊した時代でも、時が償うことがあるのであろうか。時代が贖うことがあるのであろうか。今日、喧しき者どもは、いずれ皆、消えてなくなるのだから。

事実が過酷なのではない。過酷とは、それを受け取る感受性である。

それにしても、こんな時代に生まれ合わすとは、不幸という以外にない。世が世なら、私たりとも、時代への何の疑問も抱くことなく、何ほどかのことをやりとけただろうに。

私の思想は、今の世に受け入れられることはないであろう。さらに、後の世にも受け入れられることもないであろう。

無節操な奴らが榮え、節操を守る者が滅ぶ時代。

時代の構造に適った者は幸福である。

人みな昏みたり。

いつの時代でも、反時代者はいた。しかし、今日ほど、時代と反時代の間埋め合わすことのできない深淵が横たわっている時代もないであろう。今日では、両者の間に、文化的

同一性がない。

時代としてのニヒリズム。騒音。饑舌。あらゆるものの数量化。無感覚。無感動。欲望の氾濫。

理念なき者は幸いである。彼らは、歴史の重荷を背負わずに、重箱の隅をつつくような議論をしていけばよい。理念をもつ者は、時代の苦痛を味わわねばならない。

現代、地図なき時代。さすらい人は、地図を作らねばならない。そして、自分の立っている位置を測定しなければならない。

癌患者の体は癌細胞でいっぱいだが、そこにも、まだ、正常な細胞がわずかでもある。しかし、ここでは、癌細胞の方が正常で、正常な細胞の方が異常とさえされてしまう。とはいえ、癌細胞が最後の正常な細胞を駆逐したとき、癌細胞もろとも、生体そのものが死ぬ。現代という時代は、癌細胞に犯された生体のようなのだ。

時代の中にいる者は幸いである。彼らは、時代に疑問を抱くことなく、時代のうちにあつて、その流れとともに生きていけばよいからである。それどころか、その流れを加速することさえできる。しかし、時代の外にいる者も幸いである。これも、また、時代を問うことなく、時代と無関係に生きていくことができる。それに対して、時代の中にも外にもおれない者は不幸である。彼は、内と外の境界線上にあつて、いつも、時代という得体の知れないものと果てしなく戦い続けていかねばならないからである。

創造的なものが生み出される地盤が奪われてしまった時代。特に、第二次大戦後の思潮。地盤のないところで、どうして創造性が出てこようか。それを生かす場というものが無い。精神は阻止され、窒息してしまふ。

現代では、偉大でないものが偉大とみなされる。価値が逆転する時代。もはや、偉大なものは生みだされることはないだろう。

くだらない奴らのはびこり、もてはやされる時代。何という馬鹿げた時代であろう。

時代との戦い、消耗。私に、このような仕事をさせておく時代は、不当である。実に、不当である。

多数者、これはいつも虚偽である。多数者、これはいつも墮落である。

例外者、これによって歴史は形成されてきた。偉大な精神はいつも孤独である。

近代化とともに、土俗精神、成金根性が裸のままで噴出してくる。しかも、不幸なことに、この土俗精神、成金根性に、繊細な精神は脆かねばならない。

現代人は、一九世紀以来、われ先にと坂道をころげ落ちてきた。しかも、それを登り道だと称して。

今日の時代の構造に合って生きている大衆は幸いである。

エビクロスの「隠れて住め」という言葉の背後には、混沌とした時代背景がある。騒乱、喧騒、鯁舌、散乱、混在、秩序の崩壊。

私は、どうして、時代との精神的戦いをしなければならなくなったのだろうか。

後の世に希望を託しえた時代は幸いである。まさに、その幻想によって、心ある人は、精神的創造と時代の文化的創造に従事しえたからである。後の世に希望を託しえぬ時代は禍いである。

いかなる天才たりとも、単なる個人の能力のみで登場してくるわけではない。天才たりとも、時代の場に生かされて出てくる。天才の創造力は時代の創造力なのである。

私は、あらゆる高貴なものが全面的に崩壊していくのを、まだ年若きうちに見た。私の生涯のすべては、この退廃の時代にすっぽりと覆われていた。

思想の解説ばかり流行る時代。

興味本位のもの、単なる好奇心を満たすもの、利根的なもの、気晴らし、所詮読み捨てられていくもの。大衆化時代の文化。永遠の喪失。

ニーチェが、たとえ、力への意志としての超人を立てようと、運命愛を説こうと、彼が予言したこの現代世界の時代としてのニヒリズムは救えぬ。このニヒリズムに腐食された現代は、それらをも呑みこんで、すべてを消費し、無価値化し、無意味化してしまう。ニーチェをも骨抜きにしてしまつて、あらゆる価値あるものを忘却の淵に押しやる。それは、ひとつの怪物なのだ。この怪物がどこへいくのか、誰も知らない。

六〇〇年、退屈で苛立たしい六〇〇年が続くであろう。大衆は踊り続ける。それは長すぎる。耐え難い。

ニーチェの時代にも、人々は、そこらの有名な学者の言うことは認めたが、ニーチェの言うことは認めなかった。かくて、ニーチェは葬り去られた。現代でも、葬り去られた者のみが、真理を伝えるであろう。

人は、ただ、有名か無名かというだけで、理解したりしなかったりする。

十九世紀、ここではまだ預言が可能であった。現代、ここではすでに預言が不可能である。預言。一つの時代の終末と新しい時代の到来の預言。

かつての偉大な人々を動かしていた時代の力が、今日ではない。あらゆる高貴な情熱を奪ってしまう時代。

一時代前の心ある思想家は、危機の自覚から出発した。現代では、すでに、危機を通り越して、危機は慢性化している。人々は、危機を自覚することなく、危機を加速している。自覚なき危機製造者。このような連中に危機を説いても無駄であろう。理解しない。理解されぬということ、これは一時代前とはまるで違う。かくて、現代においては、自覚者は、かつての自覚者より、二重の苦痛を味わわねばならない。そこには発言の場所がなく、無視と黙殺が支配する。現代では、すでに、預言が不可能なのである。

時代に背を向けた者のうちにも、時代は住みこむ。

伝統から時代があまりにも遠ざかってしまったから、それと戦ってきた私でも、それと同じ道を通ってしまう。

物心つき、さて何ほどかの仕事をしようかと思つたとき、そのとき、私にとっては、時代はすでに過ぎ去ってしまった。

歴史は、いつも、例外者によって、開かれてきた。

知行の不一致者のなんと多いことか。特に、知識人。知識人は、その時代、その時代に、その時代の言つて欲しいようなことを体のよい理屈にして言う。行いは伴わない。

## 文明について

繁栄は精神の頹落をもたらす。帝政ローマの繁栄をみよ。

文明は、自己自身を消し尽くしてしまうまで成長する。

いかなる文明も疲れるときがある。生き物がそうであるように。

文明とは物ではない。たとえば、それが物質文明であっても。文明とは、むしろ、物を形成し、造形する人間のエネルギーである。そこには、目に見えない情報がなければならぬ。そのエネルギーがなくなると、文明は滅ぶ。巨大な遺跡を遺して。それは、石炭や石油を遺して滅んだ古生代や中生代の生物に似ている。確かに、文明は生き物に似ている。

壊れそうな壺はもとに戻すことはできるが、壊れてしまった壺はもとに戻すことができない。

繁栄への道、それはまた、衰退への道である。

文明という名で、市民としての品の良さ、誇り高さ、剛健さを意味するとすれば、現代では、文明が進展すれば、文明が衰退する。

膨張しすぎることで、そこから破綻がやってくる。古代ローマ文明のように。

普遍の特殊化。特殊の風土なくして、普遍は育たない。例えば、仏教の日本化。キリスト教のヨーロッパ化。

古代エジプトのファラオなど、古代の王は決して権力者ではなかった。王宮や神殿を権力の誇示などとみるのは、近代の偏見である。それらは、共同体の統合の表現であり、神

的なものにつながる。

文化人類学。未開社会のすばらしさを調査するのに、予防注射を打ち、飛行機に乗って出向く。未開社会のすばらしさが礼賛されるのも、文明の利器に囲まれた世界においてなのだ。知ることを行なうことの分裂。

文明が遅々たる労苦によって築きあげられてきたように、その滅亡もまた遅々たるものであろう。創造も崩壊も一挙に行なわれるわけではない。

人みな終末を語るとき、いまだ終末きたらず。人みな終末を忘れしとき、終末きたり。

かつての預言者にとっては、終末は目近く、再生は遠くなかった。だが、今日の文明にとっては、終末と再生は遠く、歴史の地平線の彼方に隠れて見えてこない。

このような文明は滅んだ方がよいのである。そして、原始に戻るがよい。

人間をはじめ、生きとし生けるものに死が必要なように、文明にも、人類にも、死が必要である。

すでに、私は、将来への哀悼の意を表している。

終末以後の静寂においては、ニーチエの超人も死ぬ。

私は、すでに、世界史の終末の砂漠の上に立っている。すべてを終末の場から見ること。

あらゆるものが終わり、あらゆるものが崩壊していく。後にくるものは、ただ空しき精神

の砂漠のみ。

現代は迷妄のはびこる時代である。そして、滅ぶべき運命をもつ時代である。私は、すでに、その終末以後を生きている。

考古学的終末。私は、すでに、現代のあらゆるものうちに死相を見る。

現代文明は救い難いと言わねばならぬ。現代文明が、その原理ゆえに滅ぶこと。それがカタルシス(浄化)である。

しかし、歴史の終末を先取りしてしまった者は、歴史が終末を迎えるまえに、自己自身が終末を迎える。

人間の営む文明も地球の物質循環の過程の中にある。文明は、自然から材料を得て、それを収斂させ、文明をつくる。そして、それを再び自然に返す。文明も、生命同様、大地から生れ、大地に帰る。

鉄器の発明と高度化。それが戦争の増大をもたらし、宗教や哲学の高度化を興こした。人間の性悪性が自覚されたからである。

いつの世も、小芸の者が受け入れられる。

## 正統精神について

かつての時代の肯定的なものの回復をとくとくと語っている者は時代錯誤であり、認識の怠慢であり、無知である。それが受け入れられる前に、時代は、それらを掻き消していくであろう。いまさら、そんなことを言ってみるところで。

私は、古典主義の不可能を自覚した古典主義者である。

今日のような時代でも、正統精神は、なお、やすし、やすしと言う。

家が燃えているというのに、「心頭滅却すれば、火もまた涼し」とのたまう禪者がいる。こんな時代に、果して、悟りすましていてよいのか。私は、なお、「火を消すべし」と言う。

今日のような昏みたる世に、悟っている奴らは馬鹿である。

悟っても、意味のない時代。

悟りすましてはいけない。この世のことは、悟りすましただけでは、すみはしない。

こんな時代に、末法でさえないこの時代に、悟りすまして生きていること自体、間違いである。

阿修羅は言う。「我、汝らに告ぐ。四聖時代は終わったり」と。

自分だけが、どうして安全でいられようか。自分だけが、どうして無傷でいられようか。自分だけが、どうして悟りすましていられようか。自分だけが、どうして我一人潔しとしていられようか。故郷を失った世界は、自分自身の中にも住み込むのだ。

正統あって異端あり。ところが、現代では、正統というものが無い。それゆえ、異端も、もはや異端としてありえない。それどころか、現代では、異端があたかも正統であるかのような位置を占め、逆に、正統が異端の座に落ちる。正統化した異端、それはデカダンで

ある。

現代においては、正統精神は阻止され、意味をもたない。俗衆と俗衆に阿る知的俗衆の謳歌する時代は、それを断片化し卑俗化してやまない。現代においてそれを死守せんとする者は、余分の苦痛に耐えねばならない。無益な徒勞と忍苦。

己が悟りの高みから現代を切り捨てること、あるいは、伝統を称揚すること、それはある意味で容易である。また、もてはやされる。しかし、それが見落としていることは、自らもまた現代の類落に呑み込まれているということ、否、それを踊ってさえているということ、自らのうちにも類落は住み込んでいるということ、そのことである。そのことを自覚していないなら、それはまやかしかである。しかも、まやかしかはもてはやされる。それは、一種の詐欺である。

衆生済度という。済度すべきほどの衆生か。衆生を、迷惑にも、済度せんとする覚者。

故郷喪失の時代には、自らもまた故郷を喪っている。

われ一個の悟りや救いは、あるいは、可能かもしれない。しかし、それを可能にするには、そういうことを可能にする世界がなければならぬ。現代では、そういう世界がない。

現代、精神的場所の全面的崩壊の時代、ここでは、もはや、かつての伝統的な思想では、われ一個も救われないし、時代全体も救われない。

## 高貴な精神

低俗なものもてはやされる時代。高貴な精神には、場所がない。

精神の強制収容所としての現代。

私は、世紀末の思想家の一人である。

力への意志。それは、時代という得体の知れない力に敗退せしめられた者の知る思想である。

匹夫、わが志を奪うべからず。

高貴な精神は阻止される。

確かに、今も、なお、精神の高貴な輝きを宿した者もいる。しかし、その言葉も、砂漠に水を撒くように、どこかに消え去ってしまう。

俗衆と戦うべからず。俗衆、傷つくことなし。汝のみ傷つけり。

高貴な精神の残照は、かつての正統精神の余光である。

私は傷ついたソクラテスだ。

ヨーロッパ十九世紀の世紀末も、文化の全面的崩壊の時代であった。そのような時代にも高貴な精神はいた。しかし、崩壊の大波の中で掻き消されていった。

ヨーロッパの十九世紀にもルネサンスはあった。キルケゴール、ブルクハルト、ニーチェ。彼らは、キリスト教やギリシア文化の原初に帰った。しかし、それは、時代の大きな潮流

にはならず、彼らは例外者となった。彼らが原点に帰れば帰るほど、彼らは時代から遠ざかり、除外されていった。これが、十五・十六世紀のルネサンスとの違いである。十九世紀、この時、ヨーロッパはすでに歴史から逃走し始めていたのである。以来、ヨーロッパは、本来の姿には復元することはなかった。

ゴッホとニーチェ。芸術や哲学において、型や体系が不可能になっていくなかにあって、自らも型や体系を否定しつつ、それでいながら、なお、ものの真実、ものの生命に迫ろうとした。十九世紀ヨーロッパの世紀末。

現代においては、高貴な精神は、真理の不可能を自覚しながら、真理を語らねばならない。それは苦痛である。

崩壊の時代に場を得て出てくるものは、気の利いた饒舌家である。高貴な精神は、場を失う。

かつての偉大な精神も、現代では、すでに博物館の陳列品のようにである。高貴な精神は、その残り火にすぎない。

歴史の抗し難き激流。文化の頹落と戦わねばならなくなるとは。

大衆化の時代、高貴な精神は、何ひとつ理解されない。

頹落の時代の喧騒と消耗の中にあつて、それでも、高貴な精神の言葉は、暗闇の中の一筋の閃光のように、輝いて見えることがある。

高貴な精神が、半世紀もの間、不愉快と不満の中に過ごさねばならないとは。

精神の崩壊の時代、場所を失った高貴な精神は、原初の光に立ち返りつつ、時代そのものを徹底的に批判する。

世に認められず、野に下り、世間から黙殺された天才の事蹟を、百年経つてから、あれこれと解説して飯を食っている奴ら。大学教授達。

これほど低俗な出版物が大量生産されている時代。高貴なものは、ますます圧殺される。

結局、この時代には、高貴な精神は、専門バカや道化の世界から跳ね除けられ、孤絶する。現代は、専門バカか道化の時代なのである。実に。

現代では、高貴な精神は排除され、異端者となる。

大衆に敵対した者は、大衆から抹殺される。

大衆化。凡庸の勝利。高貴なものの略奪。高貴なものへの破壊的侵入。そして、高貴なものへの敗北。

現代という時代。私は、いつも絶対の拒否を受ける。住むべきところがない。世界がない。

私には、理解者という者がいない。時代は、私を阻止し阻害する。

文化の崩壊期における高貴な精神の苦渋。それは、時代に対する苛立ちであり、収まりのつかぬ憂鬱であり、どうにもならぬ怒りである。

時代との戦いの中で、高貴な精神は自らの寄って立つ場を失い、自らを苛み、疲弊し、戦

いに敗れる。そして、彼自身、真理から遠ざかりさえする。

かつての高貴なものを自己一個のうちで守ろうとして、高貴な精神は自らのうちに閉じ込める。精神の自閉症。

精神なき時代に精神の高貴性を護らんとすることは、あまりにも悲惨である。ここには、偉大な精神を生かしていた時代精神がない。この時代に偉大に見えるものは、偉大を仮装する者であり、崩壊を踊る者である。

低劣なものの特権。精神の高貴性を圧殺するもの。語っても意味なく、語る場もなく、語る気も起さない。

低劣な者のみがさばり、高貴な者が、その場を追われる。

現代における高貴な精神の声は、現代の墮落の潮流に掻き消されてしまう。高貴なものの意味をもち、生かされる場所がない。ここには、それを承認する者も、敬意を払う者も存在しない。高貴な精神は、語る意味を、はじめから剥奪されてしまっているのだ。時代の場所は、すでに、低劣なものによって占拠されてしまっている。現代において力あるもの、それは、大衆に媚びるもの。

高貴な精神は、絶対の矛盾に面している。彼らは、自ら語ることもはや理解されないと、いうことを前提にして、自ら語らねばならない。

大衆が私の言うことを理解するのなら、私は、私の思想を語る必要はないであろう。大衆にはもはや通じないことを知りながら、私は語らねばならない。一つの絶対矛盾。

大衆に逆らった者は、彼らから退け者にされ、必ず滅びる。衆寡敵せず。

ニーチェ。彼も、今日では、馬鹿どもの餌食になっている。例外者の悲劇。

高貴なものの破産。窒息。

現代では、高貴な精神は、故なき攻撃を蒙るか、薄笑いの拒否を受けるか、黙殺されるか、いづれかである。

高貴な精神は、見えざる時代の如何ともし難き圧力によって排除される。

精神なき時代では、精神は、極少数の高貴な精神の魂の中に逃げ込む。

高貴な精神は、時代との戦いの中で、避け難き運命の渦に巻き込まれ、滅んで行く。それは、遅く生れし者、時代に抗しし者の運命である。

高貴な精神は世界に阻止されている。窒息。それは、時代の運命なのだ。

高貴なものの護持。それが、私の運命である。運命への殉死。

護持すべく罰せられし者の運命。無限の課題。

すべては運命なり。げに、運命なり。

自己の中に見ることがあるときは、〈見ざる〉。自己の中に聞くことがあるときは、聞かさる。自己の中に言い尽くせぬことがあるときは、〈言わざる〉。〈見ざる〉。〈聞かさる〉。〈言わざる〉は、単なる処世術ではない。

天才は真理に嫉妬される。

秋の虫の触覚のような鋭い感受性でもってとらえられたその時代の精神状況、それが必ず  
真実を伝えるであらう。

高貴な精神の沈黙、現代。

## 祖国に寄せて

すでに腐りきった祖国。山河は荒廃し、人心は腐敗している。

いずれを見ても亡国の民。彼らは病み呆け、眩みきっている。

ただ墮落の一端を辿る祖国。もはや目覚めることはないであらう。

祖国を失った魂。

敗戦は単に国家の敗北ではなく、文化の敗北であった。

すでに、わが祖国は文化的に崩壊してしまっている。経済的繁栄が何になろう。そんなものは、砂上の楼閣のように、すぐに倒壊するであらう。

祖国はすでに滅んだ。その後の祖国は余生を生きているにすぎない。

愛することのできなくなった祖国は、愛することができない。こんな祖国を、どうして愛することができようか。われ、もはや、わが祖国を思わず。

住む家を喪なつた家なき子のように、愛すべき祖国を喪なつた者の悲劇。

我、祖国の目覚めのために動けり。世の人、我を疎んぜり。我、傷つけり。

祖国を愛いし者が時代によって疎んぜられたとき、生きることそのことが重荷となる。

ナショナリズムではなく、パトリオティズム。

愛国心をもつことが罪悪であるような祖国。

一国の文化の崩壊、それは、それに参加する者を運び、それに反対する者を強制する。

時代の変わりとともに、手のひらを返すように、なんのためらいもなく、自らの思想を変えていく多くの転向者を、私は見た。無節操な知識人の氾濫。

かつて、戦争礼賛者であつた者が、今は反戦平和主義者になつてゐる。彼らは「騙されたのだ」と言う。騙されたのなら、騙された責任を取らねばならない。彼らは「強制されたのだ」と言う。強制されたのなら、せめて沈黙すべきである。われ先にお先棒を担ぐとはなにことか。彼らは「反省したのだ」と言う。平和になつてからの反省は、反省ではない。迎合である。

志なき国を持続することに、何の意味があろうか。志なき国には、終止符を打つべきであ

る。不治の病にかかった病人は、そのまま生き長らえさせるより、早く死なせた方がよいのである。

ああ、なんという昏みたる者どもの世であろう。父祖を蔑ろにする者どもの天下。文化の破壊者達。彼らは、私を抑圧し、白眼視する。なんという屈辱であろう。

志を喪った祖国よ、とくとく滅ぶがよい。

わが祖国は滅び失せよ。そして、わが日は呪われよ。

昏みたる祖国。敗北せしパトリオティズム。愛国者の嘆き。エレミヤの苦悩。

## 預言の重荷

私にとって、過去の偉大な精神はすでに重荷であり、極悟である。それがもう不可能になったことを思い出させる。

ちようど、憤死した主君に殉死した臣下のように、私は、過去の偉大な精神に殉死しようとしているかのようだ。

復古主義も、今日では、単なる生物学的反作用にすぎない。ちようど、死につつある人間が痙攣運動をするように。

古き良き時代への憧憬を抱きながら、その不可能を知りつつ、同時に、過去の重荷を背負って、この荒廃の世界に立たねばならぬ者は、どれほど苦痛を味わわねばならないことであらう。

過去の歴史は、精神にとって重荷である。精神はいつも歴史に対して負い目を負っている。歴史に対して負い目を負わない者は、平気でこれを壊し、骨抜きにしてしまう。

原初に帰れ。現代では、それは不可能である。私は、もう住むべきところをもたない。それは、ただ重荷としてのみ残る。預言の重荷。

精神の重荷を背負わなくてもよい者は幸いである。

精神なき時代には、高貴な精神は、自らの存在を重荷とする。かくも、高貴な精神に重荷を負わせる時代もない。

預言の不可能になってしまった時代では、高貴な精神は、ただ、重荷を背負って、沈黙を余儀なくされ、重い足を運んでいくのみ。

文化に対する責任をもつ者が文化の全面的崩壊に面したとき、どうなるか。自己の存立基盤を失い、生きていくことが重荷となる。

もはや、通用しない現代において、過去の偉大な精神を背負わねばならないことは、負い目以外のなものでもない。私にとって、過去も現代も重荷である。

崩壊の時代には、高貴な精神は大衆から排除され、黙殺され、過重な負荷を負う。余計な重荷。余剰の負荷。余分の忍苦。無益な労苦。徒勞。

過去が、現在においても、将来においても不可能と知るとき、高貴な精神にとって、現在の生そのものが重荷となる。

現代に逆らって精神を持續することは、耐え難い重荷である。

時代の不幸を、高貴な精神は、自らの沈黙のうちで一身に背負い込む。その重荷は、囚人の鉄の鎖のように重い。

## 否定者

阿修羅は否定者である。

精神の崩壊期には、高貴な精神は否定者となる。否定者は、過去を否定し、現在を否定し、未来を否定する。どこに肯定しうるものがあるか。

ニーチェは、過去を否定し、現在を否定し、未来を否定し、その行きつく先に新しい〈超人〉の時代を予言した。しかし、私は、その〈超人〉さえ否定する。

私にとって、一切は景色にすぎぬ。

かつての肯定的なものが、否定者にとっては重荷となり、否定者の魂を憂鬱にする。

時代はすでに昏みたるゆえ、私は否定者とならざるをえない。

否定者は無用者となる。

精神なき時代、私には、すべてが阻止され、拒否されてしまっている。私は、否定者とな

らざるをえない。

否定者。崩壊の時代の高貴な異端。

現代において、哲学は可能か。つまり、世界の根源について一心に思惟することは可能か。それは、わずかに個人においては可能であろう。しかし、時代においては不可能である。

否定者は、あらゆるものの無意味を知り、かくて、あらゆるものを否定する。しかし、そう言うことも無意味であり、否定さるべきものである。否定者の自己矛盾。

過去は不可能である。現代は拒否さるべきである。将来にも希望はもてぬ。現象の純粹注視のみ。

## 単独者

義しき者が疎んぜられ、義しからざる者がもてはやされる。確かに、いつの時代も転倒した時代であった。転倒した時代には、義しき者は、単独者となって滅ぶ。

秋の虫の触角が逸早く冬の訪れを予感するように、単独者の研ぎ澄まされた感受性は、この崩壊の世界を鋭敏に感じ取る。

頹落した世界から排除され、まるで精神の強制収容所の囚人のように閉じ込められている単独者。現代では、この単独者のうちのみ、かつて真理であったものが宿されている。

大きな星も、大気圏に突入すると燃え尽き、小さな隕石となって落下する。しかし、その隕石たりとも、宇宙を飛んでいたときの記憶をもっている。

濁りきった水の中に育った魚は、濁りきった水のように濁りきっている。だが、その中に、濁れる水を嫌った一匹の魚がいたとしよう。彼には、もはや、生きる場がなく、孤絶する。

単独者は、真理と非真理、世界と非世界の狭間に立っている。

精神の散乱の時代に、我一人、持続する精神を護らんとする者。単独者。

現代、単独者の沈黙と忍耐のうちでのみ、精神の高貴さは護られている。

現代は、二流、三流、四流、五流の時代であって、この量的専制に敗北して、世界から孤絶した一個の単独者は沈黙を余儀なくされる。

現代、この精神なき時代が終わりに達し、死の静寂の中に消え失せたとき、そのとき、その沈黙と単独者の沈黙が一致する。

単独者の思想は、ただ単独者と単独者の魂の苦痛のうちでのみ受け留められ、受け継がれる。

今日、単独者は、低劣なものによって包囲され、抑圧されている。出版界を見よ。低俗な出版物が氾濫しているではないか。大学を見よ。大衆の波が押し寄せているではないか。まるで、悪貨が良貨を駆逐するように、高貴なものは、低劣なものによって駆逐されていく。実に、低劣なものによる圧制。何を言っても通じない。何を言っても空しい。

時代の病は、その時代の局外にあつて、その時代から排除された孤絶した単独者によって背負われる。時代の罪を贖うのは、そのような反時代者なのだ。なんとという悲劇である。神なき時代に、神に選ばれた者の悲劇。

ひとりの個人ではどうすることもできないもの、それが時代の力である。今日のあらゆる面における頹落は、もはやどうすることもできない。頹落の津波は、否応なしに、すべてを呑み込んでいく。それに抵抗した孤独な単独者をも呑み込んでいく。

浅薄で見るに耐えない時代、そして腹立たしい時代。私は、単独者として、無用者として、沈黙と寂寥のうちに生きる以外にない。

ヨーロッパ十九世紀の不幸な天才達。真実の極北を求めたがゆえに、世の欲する虚偽を語れなかったがゆえに、孤独で、不遇な運命を辿らねばならなかった。彼らは、時代の人身御供だったのである。贖罪の犠牲だったのである。

時代は、自らの罪を高貴な精神に背負わせる。

ヘルダーリンやニーチェやゴッホの狂気。それは、この非持続の世界にあって、純粹持続が自分自身を護ろうとしたときの最後の特であった。

ニーチェは不幸であった。生前は、世に認められなかったということによって。死後は、世に認められたということによって。なぜなら、生前も死後も、理解されていないことに変わりはないからである。

かつての単独者や例外者の思想も、現代では、略奪され、ひっそらえられ、引き落とされていく。

単独者の悲嘆を、誰が知るであろう。

全体に対する責任をもつ者は、時代の構造から疎外され、単独者とならざるをえない。

秘密を知った者は罰せられる。

如かず、草木とともに朽ち果てんには。

## 苦悩と絶望

時代に逆らったがゆえに、私が受けた苦痛と悲慘を、果たして、贖うものがあるのだろうか。

われ、若き時より、人の身の耐え難きを知れり。

現代の騒音によって、わが感性は破壊されていくのか。この苦痛と憤りを誰に伝えたらよいのか。

わが心病みたり。わが心病みたり。

一体、どこへ逃避すればよいのか。

わが傷つきやすき魂よ、何故、かくも傷つきやすいのか。

すでに倦み疲れたり。

虐げられた精神の恨みというものはある。

ああ、この身の耐え難きかな。多愁、必ず人を損ず。

われ、罰せられたる者のごとし。

わが心、乱すべからず。

幾十年の憂鬱。この憂鬱に、いかに耐えたらよいか。耐え難し、この憂鬱。

現代における高貴な精神の苦痛は全く無益にして、かえって、その高貴性を阻害する。

毎日毎日の一つ一つのこと、私の魂に、針のごとく突き刺さってくる。

時代をこえて、この文明の行き着く先を見届け、ぎりぎりまで生きぬいて思索せんとする者、それは、現代から排除される。

万卷の書も、わが憂いを慰むるに堪えず。

故郷、また、茨のごとし。落日、傷心を痛ましむ。

故郷にあつて異郷のごとく、故国にあつて異邦人のごとし。

現代からの斥力。時代の壁。俗衆からの拒否。孤絶。

拒絶と固執は、人をして孤絶させる。一切への嫌悪と悲愁。憂悶と寂寥。

私は、この世では、招かれざる客である。

孤愁幾十年。我、世を入れず、世、我を入れず。一日として慰いやすらうことなし。

我は我なり、我一人なり。

我いずこに帰るべきや。我いずこに行くべきや。

私は、すでに歴史の消滅点に立っている。現代世界の完全な局外者。

私は、この格子なき牢獄の中で、ひとり孤絶して、自分のうちに閉じ込められる。そして、この世のことに目を瞑り、耳を覆い、口を塞ぐ。

現代には、精神の秩序がない。精神の秩序を求める者は孤絶する。

鬼、哭いて啾々たり。朝にも夕べにも、憂い遣り難し。私は、永遠の悲嘆のうちに死んでいかねばならないのか。若くして、心すでに朽ちたり。

真理を語るにすでに空しく、非真理を語るに苦痛である。真理にも非真理にも絶望すること、それが真の絶望である。

真理が非真理に囲まれて抑圧されるとき、真理は絶望する。絶望、その中には、あまりにも多くの真理が含まれている。

念を度生に懸けず。

人、皆、いまだ望みをもちしとき、望みなし。

純粹な者は、常に排除され、時代から除け者にされる。殉難。

自らの滅びの形式においてしか、今日、真理は語りえない。十九世紀末のヨーロッパの思想家や芸術家も、そうであった。例えば、ニーチェやゴッホ。彼らは、彼らが生きていた時代には、時代の波に飲み込まれて、理解されることもなく、無視されていた。

世界が開かれてこない。場が開かれてこない。

精神の散乱と頹落の不気味な波動のうちで、ただ盲動するだけの現代においては、純粹な精神は阻止され、窒息せざるをえない。

このような退廃と頹落の時代には、純粹な精神は、純粹を護るために、そこから逃避しなければならぬ。逃避、それは純粹の徴表である。

すでに、道を求めるに飽きたり。

万事やむ。今さら、何を期すことができよう。

時、われに利せず。今さら、何を語ろう。

かつては天を突かんばかりの志気があった。しかし、末世の軽薄な風潮が純朴さを払拭し

て以来、もはや、それを持続してはいられない。

## 精神の怒り

精神の怒りの炎は自分自身を焼き尽くす。

現代という時代の一切が実に腹立たしく、不愉快である。このような時代に生きていること自身が、すべて恥である。

怒りは自らを傷つけ、自らを滅ぼす。しかし、その怒りを抑えることのできないときがある。

真理と非真理の間に立つ者は、語ることが剝奪されている。沈黙。怒りは、そこから生じる。

大地はなお沈黙している。しかし、それは怒れる沈黙である。大地が、大音声をあげて怒れる時がくるであろう。

それでも、大衆は踊り続ける。この癒し難き者ども。彼らに鉄槌を食らわすには、突発的な大地震しかないかもしれない。とくとく滅び失せよ。

石に刻んでおけ。わが怒りの声を。

三界苦界の闇の世界に、ただ、怒りあるのみ。怒りのうちに、我あり。

くだらないものもてはやされ、気高いものが蔑ろにされる。ただ、怒りあるのみ。

ソクラテスや松陰の死は名誉ある死であった。ところが、今日の自覚者は、場所を奪われ、黙殺され、何の名誉も与えられず、死んでいく。死に甲斐もなければ、生き甲斐もない。

現代、この頹落の時代、何ほどかの努力をしようとしたなら、たちまちにして、怒り、不愉快、疲労、消耗、あらゆるものに出合ってしまう。

大衆の心根の卑しさに、高貴な精神は怒る。大衆との戦い。しかし、その大衆との戦いに、高貴な精神は必ず敗北する。

新聞の広告欄を見よ。本屋を見よ。大学を見よ。大衆の占拠。どうすることもできない無力感と憤り。ただ、怒りあるのみ。

精神の怒りは、嘆きの言葉を発して死に行く。

昏みたる者どものために、日のもはや照らすことなく、闇よ、この世を包め。地よ、奮い立ちて、怒りを発し、雨よ、恵みを与えたもうな。天よ、嵐を起し、洪水を起し、世の人を罰せざらんことを。何故、天地の神々は沈黙せるや。滅び失せよ。滅び失せよ。

低劣な奴らがよい位置を占め、まともな者がくだらぬ場に貶められている。

戦いの思想。これは、戦いに敗れた者のみが自覚する思想である。

## 抗議

神が人間を作った芸術家だったとすれば、神は、まったく下手な芸術家であった。

死せる神は、我に語る。「汝、戦いによりて、わが死を贖うべし」と。されど、我は、応える。「神よ、何故、かくも重き荷を、この心弱き者に課せしめたもうや。我、すでに疲れたりしと」。

この耐え難き生を耐え、この忍び難き生を忍べと、神は言うのか。

神は強欲である。才能を少なく与えた者からも、まるで取税人のように、多くのものを取り立てる。

何故、義しき者が禍を受け、義しからざる者が福利を受けるのか。

神は、私の叫びに、耳を傾けない。

神の創造したこの世は、人間にとって、苦しく、辛い重荷である。

人間は、神の虜であり、人質である。この世という牢獄に幽閉された囚人である。

一向に来ない最後の審判。神は何をしておられるのか。

神が無から世界を創造したのは、無から醸し出される不安と倦怠からであったらう。神は世界を創造して、この不安を忘れ、倦怠を紛らわそうとした。被造物にとっては、とんだ迷惑である。

神は罪ある人間を創造すると同時に、神であつて人であるような神の子を、人間の世界に遣わし、人間を救うという。神の人格、それは二重人格なのか。

神は、何故に、万物を創造しないでおくことができなかったのか。神は、何故に、万物創造という最大の罪を犯したのか。

神による人間の救いは、人間の悔い改めによつてなされるのではなく、神の悔い改めによつてなされねばならない。なぜなら、罪ある人間を創造したのは神なのだから。しかし、この神による悔い改めは、神の子イエスを犠牲にすることによつてなされた。これは、贖いえぬ神の罪である。

神は、万物を生んだという罪を謝罪すべきである。万物を悪と罪と苦の世界に生み、それを死の手にゆだねたことに、創造主は責任をもつ。しかし、たとえ、神が万物を生んだという罪を謝罪したとしても、神の犯した罪は贖われることはないであろう。

神は、無から一切を創造した。何故に創造しなければならなかったのか。しかも、自ら創造したものを、罪ありとする。とすれば、その罪の源泉は神にあるのではないか。創造、それこそ原罪である。神の原罪である。人間の原罪は、本来、冤罪だったのではないか。懺悔すべきは、神ではないか。

神は、すでに、無から一切を創造してしまつた。これは、取り返しのつかぬことである。創造主としての神は、存在せしめぬことができなかった。一旦存在せしめたという事実を、神たりとも、抹殺し去ることはできない。神の事実たりとも、逆戻りを許さない。神は創造しないでおくことができなかったのである。ここに、神の最大の罪がある。存在せしめるということほど、罪なことはない。それは、神による無への逆行であつた。無は、必ず、神に復讐するであろう。罪と苦と死によつて。

神が創造したこの罪ある世界に、その罪を贖うために神の子を遣わしたとするなら、実に、神は悔い多きものをもつていたであろう。神の子は、神自ら創造したこの罪ある世界の人間によつて殺され、無残な姿で神の手に返されたのだから。その変わり果てた我が子の姿

に、神は自己矛盾の苦痛を見たことであろう。

神はなぜ人間を楽園から追放したのか。人間が罪を犯したからというものの、否、罪を犯したればこそ、神は、罪ある人間を赦すべきではなかったか。楽園を追放されて以来、人間は、罪の重荷を背負い、自らを損ない、苦しみ、流離い人とならねばならなかった。それは、耐え難い苦難であり、酷い仕打ちであった。

神の子イエスは、人の罪ばかりか、神の罪をも贖ったのだろうか。

人、皆、いと易く正覚を得たれば、我、正覚を取らじ。

苦界に住し、苦を離れず。苦界、離るべからず。正覚、得るべからず。

阿修羅は、かつて須弥山の王に仕えた。しかし、衆生世界の罪を知って、須弥山の王に背いた。

修羅なくして、仏なし。仁王に踏みつけられている修羅こそ、仁王を支えている。

弥陀の救いは摂取不捨という。しかし、その救いの器はザルである。弥陀は摂取したつもりでも、そのザルからは、ほとんどの者が漏れてしまう。弥陀の弘誓の舟も泥舟のようで、途中の川面で沈んでしまう。

このような時代に、天地は沈黙し、黙して語らない。そして、時代の犠牲者を助けようとするしない。

私は、いつまでも救われるということがないであろう。私は、いつも、そこにとどまっていられることができない。

体制内の奴らは生き続ける。鉄槌の下ることはない。天は罰することさえ忘れた。

罪なき者がなぜ試練を受け、罪ある者がなぜ罰せられないのか。

## 沈黙

言葉の消費。沈黙の忘却。現代。

大自然の猛威と死に面したとき、人は沈黙する。

石が尊厳性をもつのは、石が沈黙しているからである。

おしやべりの背後に沈黙がなければならない。

大初に言葉はなかった。ただ、沈黙のみ。

存在は沈黙を要求する。

ものにはすべて時があり、終わりがある。そして、終わりには寂寥がある。

精神なき時代では、高貴な精神は沈黙する。しかし、この騒音の時代、その沈黙も打ち消されていく。語ることの無益と沈黙の無益。

時代は、私に、ただ沈黙のみを要求し、沈黙を強制する。

世みな昏みれば、真理、我をして、語らんとすることを禁じたり。

沈黙には憤りが秘められている。

現代、この饅舌の時代は、高貴な精神の沈黙の犠牲のうえに成り立っている。現代では、この極少数の高貴な精神の沈黙のうちで、わずかに精神の高貴は護られている。現代では、沈黙のみが高貴である。永遠の沈黙、そして、沈黙という牢獄。

永遠の静寂を見る者は、永遠に沈黙する。永遠の静寂。人生も、世界も、歴史も、そこへと消えゆく永遠の静寂。

現代文明は沈黙する砂漠へ滅んで行った方がよい。

否定者は沈黙する。沈黙の中にこそ否定がある。

真理の声は沈黙した。

大自然の猛威と死に面したとき、人は沈黙する。

石が尊厳性をもつのは、石が沈黙しているからである。

おしゃべりの背後に沈黙がなければならない。

大初に言葉はなかった。ただ、沈黙のみ。

存在は沈黙を要求する。

ものにはすべて時があり、終わりがある。そして、終わりには寂寥がある。

## 人生について

人間が幸福を追求し出して以来、人間は不幸を意識し出した。幸福と不幸の分裂は、人間にとって最大の不幸であった。

歴史と同じように、人生もまた想定外のことによって動いていく。人生は偶然に満ちている。幸運と不運は、糾える縄のごとし。

幸せとは仕合わせということであり、巡り合わせということであり、偶然ということである。不幸せも同じことである。運と不運。人生は偶然に満ちている。

人は、生き続けることによって、時間を作っている。そして、作った時間を食いつぶし、やがて食い尽くす。生きるということは、結局、時間つぶしなのか。

運命の女神は気紛れである。確かに、人の一生は、ほんのちよつとした偶然で長い不遇と不幸の道を歩まねばならないことがある。人生は、一度踏くと、いつまでも不運の星に司られる。人生は偶然に満ちている。

小説の主人公に対して、彼がある必然性によって死ねば、われわれは、そこに大きな運命の流れをみるように、ちょうどそれと同じように、われわれは、自己に対しても、死の運

命によって完結することを望んでいる。

幸福は充足感の異名である。しかし、この世では、完全で永続的な充足感はない。

目的の実現は目的の喪失である。

栄枯論するに足らず。

あらゆる可能性がある。しかし、誰にも残されているのは、それらのうちのほんの砂粒ほどの可能性でしかない。

いかに生きるべきかと、人は問う。だが、それには、それほど高邁な哲学など必要としない。世間の知恵で十分である。しかし、現今では、そのような知恵は滅び去ってしまった。それを育てた人倫が崩壊したからである。

人生はほとんど偶然によってなりたっている。この世の存在自身が偶然である。どうして歴史が必然であることがありえようか。

鳥は生きるかぎり飛ばねばならないように、人は努力するかぎり苦しまねばならない。

しかし、人間は、努力しないかぎり、悩まないものだ。

一の成功の背後には、九十九の失敗がある。

成功することのない失敗。失敗の連続。しかし、それでも、それは失敗の加法でも乗法でもない。

人生百に満つことはめつたにないのに、われわれは、いつも、千年の憂いを抱いている。

人生と歴史は、必然と偶然の戯れである。

人生と世界は有理数ではない。無理数である。無理数を有理数で解こうとするところに無理がある。

人はいつも虹を追って生きている。

世の中が自分のものでないように、自分自身も自分の所有するものではない。

得るものがあれば、失うものがあり、失うものがあれば、得るものがある。

人の一生の中では、それゆえに道を誤り、それゆえに再起できぬようになるほどの一大過誤が時としてある。ちょうどそれと同じように、一国の歴史にも、そのような運命的な道の誤りがある。

人生に対する理想主義者には、人生の現実には、もっと苦や悪、罪に満ちていると言わねばならない。

求めることは得ることを期待する。得ることは、また、求めることを促す。人は、それでもって生き、それでもって苦悩する。

希望、それは、実現されたとき終わる。

人間が我が身の幸福について考えねばならないということほど、不幸なことはない。

知っているべきことを知らないのは不安だが、知らなくてよいことを知っていることは重荷である。知らなくてよいことを知らないのが幸福というものである。

禍を転じて福となすことができるのは、遭遇する出来事がもともと多義性をもち、禍と福の重ね合わせの状態にあるからである。

この世は罪つくりの世である。われわれは、長く生きているだけ、それだけ、多くの罪を積み上げていく。

人生、迷路のごとし。

笑いささめく娘達よ、あなたがたは幸いである。

幸福と不幸はいつも隣り合わせにいる。

歳月は人を待たない。しかし、人は歳月を待つ。

権限外にあるものはいかんともしがたい。ただ、権限内にあるもののみが自由である。

会者定離、愛別離苦という。しかし、離れることなくして、会うこともできぬ。別離なくして愛もなりたない。

余分の苦を背負うものは、余分の知恵を生む。

人生は延長戦だ。死んでも続く延長戦だ。

多くの知識はいたずらに精神を疲れさせるのみ。

あまりに多き知識は人を悩まし、人の心を乱す。知識の貧しきは幸いなり。

人間は想像力をもつがゆえに、不幸になる。

人生とは、自分で自分を騙す手品のようなものである。

久しぶりの友人知人と会ったり、親類兄弟が会ったりするとき、大概、会食する。これは、食べるといことが、単に食欲の充足、食糧補給ではないことを表現している。

ハイヒールのちよつとした履き心地にも、大きな不幸はある。

女は、子供の名前にそれほどこだわらない。女は、名前というような社会関係以前のところで生きている。生命の根源のところで、その持続を司って生きている。女は、国家や社会なしでも生きていく。

私は私であって、私以外のものになることはできぬ。

自己を語るということは、自己を騙ることである。

大海を知った井の中の蛙は不幸である。

故郷を離れた者は、故郷を知る。

さらしてさらけさせるような自己なら、それは自己ではない。

私の望むのは、ただ、次のことだけである。何ものにも煩わされずに、できるだけ静かな心をもって、じっくりものを考えうるわずかの場を見出すこと。そうだ、場なのだ。しかし、このような場を見出すことは至難に近い。喧騒の時代。

人生はお芝居だという。だから、それはまた遊びである。余計なことをする。

人は、みな芸人のようなものだ。人気があるときに華で、人気がなくなれば終わりである。

われわれは、世の中という舞台上で芝居を演じている俳優である。楽屋に帰れば、目も当てられない。

恋愛は舞台、結婚は楽屋裏。

天才の生涯も、凡才のそれと同じく、ほんの数行で要約してしまえる。

花の散るまでは、花はまだ咲いている。日の暮れるまでは、日はまだ空にある。

しかし、日暮れになれば、鳥はねぐらに帰る。

人はただ名のみにて生きるにすぎない。そして、その名は、常に、水の上に書かれた文字

のように空しい。しかも、その水は一体いずこに行くや、誰も知らない。

生きるということは、アカやゴミを出すことである。

人生の旅では、どこで死んでも、客死である。

「恥多き人生であった。人生は恥の上塗りである。

天は、しばしば、自ら助けられない者を助ける。そして、自ら助ける者を助けない。

われはわれなり。われひとりなり。

鵝外は「馬鹿馬鹿しい」と言って死んだ。私は「くだらない」と言って死ぬことだろう。

不愉快な人生であった。逆風以外のなものでもない。

人生は蟻地獄のようだ。もがけばもがくほど、苦しみの深みに陥っていく。

私にいつも否定的呼び声をかけるものは、私のうちに住みつき、いつまでも去ろうとしな  
いわが憂鬱である。

人は生れて、生きて、そして、死ぬ。

この世に生を受けたこの恨みを、私は、一生忘れることはないであろう。

人生、一夜の悪夢。

われ疲れたり。

わが心、年中無休。

生きていること、それ自体が、時間つぶしのようなものである。

青春には必ず悔いがあり、人生には必ず恥ある。

わが心、慰むるものなし。

すべてを諦めよ。憤りを鎮めよ。

仮の世。露の世。実に。

師友に恵まれると恵まれぬ、その差の大きさ。

冬来りなば春遠からじという。されど、我に春來たらず。

咲くことさえできぬ花に、どうして、散ることができよう。

間違っていたのだ。生まれてきたこと自体が。

命長ければ、恥多し。

万卷の書も憂悶を癒すに値せず、かえつて、悲愁を増す。

露の命とはいえ、長く苦しいことのみ多い。

青春は虚偽である。

人生はドラマだという。ただ、大概、滑稽で馬鹿げているだけである。

わが心楽しむことなし。

人生の傷は深い。決して、癒えることはないであろう。ひとたび傷ついたものは、癒すことができない。

長かりしかな、七十年。災いなるかな、七十年。耐え難かりし、七十年。空しかりし、七十年。倦みも、飽きたり。

この世のことは遊びである。ただ、遊びには、飽きる時がある。

人生とは、砂の上に書かれた一本の線のようなものだ。

この世のあまりに多き労苦は魂を傷つける。

物心つきて、一日として心楽しむときがあったであろうか。わがうちなる憂愁。

われ若きときより、あらゆる悩みに遭いたり。われ若きときより、あらゆる悩みを忍びたり。わが悩み癒すものなし。わが悩み願うものなし。

客、半日の閑を得れば、主は一日の静心を失う。

ああ、なんとという一生であったか。苦あり、恥あり、怒りあり、愁いあり。

ただ、諦観あるのみ。

憂鬱。ああ、なんとということか、この享楽の時代に。人生を厭う。

この世に生れきたりて、七十年。一体、これは何なのか。まったくの偶然。

私にとって、人生は義務にすぎない。

生きるということは、罪をつくって生きるということである。

諦観の場から、すべての人事を眺める。

至誠、人に通ぜず、天に通ぜず。誠は人の道にあらず。

人生は食い潰し、すり減らしなのか。益なき労苦のうちに、身を果ててしまう。

厭世家は生を厭いつつ生き、生きつつ生を厭う。

私の人生にとって最大の不幸は、よき師、よき友、よき兄弟を、なにひとつもたなかったということである。つまり、私は、よき時代をもたなかった。

私は、実に悔い多く過誤多き人生を送った。なかでも、最も悔い多き過誤は、この世に生き長らえてしまったということである。生き長らえれば、それだけ多く、人の世の醜態を見ってしまう。

悔いて甲斐ない悔いを悔い、恥じて益ない恥を恥じ、望んで空しい望みを望む。

幸福は東の間。あとは、苦のみ。

私にとって、未来は希望ではなく、過去も慰安ではない。

他人のスピーチを我慢して聞き、他人の話に無理にあわせて話をし、美味くもない料理を食べ、義理だけで出席したようないやなパーティというものがある。私にとって、人生とは、そのようなパーティである。

日々に悲劇あり。

かつて、どれほど多くの人達が犬死していったことだろう。どれほど多くの人達が、志半ばにして死んでいったことだろう。多くの労苦は精神をスポイルする。

私の青春時代は、恐ろしく短調で変化の少ない生活だった。そして、ほとんど楽しいというところを感じることがなかった。私には、青春時代というものがなかったのである。

倦怠、労苦、嘆息、絶望、孤独、困窮、焦燥、失意。私の青春時代は、おおむね、灰色で塗り潰されていた。

私の心に波紋を呼び起こすもの、私はそれを厭う。考えてみれば、この世のことは、すべて、私の心を惑わすものである。

自らの生苦と戦い、消耗し、疲れ、今にも倒れそうになって、ようやく、死というゴールに辿り着く。人生は馬鹿げた馬拉ソンだ。

人生の損益計算書を作ってみたまえ。大概の人は、損の方が多くなるだろう。益は、どこへいったのだろう。

わが不幸な魂を、一体、何に託したらよいのか。

わが不幸な魂よ、おまえは、一体、いずこに帰ったらよいのか。

過ぎたる労苦は、人を損なう。憂い多ければ、人を損ず。何の益するところもなし。

心を静かにもって生きること。ストアの賢人やエピクロスの語ってきたこと。私が望んできたことは、それだけのことだった。しかし、世間はそれさえ許さなかった。

落伍者の目は、世間の不信、人間の醜い実相、偽善を見る。それは、不幸なことだ。

私は、わが魂に鎧をつけ、わずかにわが弱き魂を守ってきた。

何故、こんな憂き世に生れてきたのか。

今日、すでに老いたり。余生云うに足らず。

わが病める魂は、常に、慶びの宴を喜ばず、悲しみの家に閉じ籠る。

わが心病みたり。わが心病みたり。

人生、悔いあり。ただ、ひと言、恨みを飲んで死ぬと。

常に、恥に上塗りをしながら生きる。それが、人生というものである。

この世は戦いである。

生きることをもって幸福とすることはできない。苦のない生はない。

諦観。あきらめて、耐えるということ、それのみである。

間違っ生れてきた者は、間違っ生きていかねばならない。

人生は余剰の労苦であり、余計な忍苦であり、無益な徒勞である。

人生はお芝居だという。だが、なんと、おもしろくもない芝居であることか。

げに、この身の耐え難きかな。しみじみと、生を呪う。

私は、世を厭い、生を呪ってきた。

厭世家の長生き、それは、神の祟りである。

死すべき者は死すべきである。

いかなる星の下に生まれしや。生きて、虚危の星を司る。

コンクリートの道路の隙間に生えてくる草花のように、私は生きてきた。

人生いかに生くべきかと、人は問う。しかし、それに答えるのに、何ら高邁な智慧の学問など必要とはしない。世間の智慧のみで十分である。だが、かつて生きていた人倫の智慧はすでに滅び去ってしまった。人倫の智慧、それが滅んだとき、人々は、生きるべき支柱を失う。支柱を失ったとき、人は問う。人生いかに生くべきかと。私は、答える。いままら、何を問うても無益と。

現代、私は、間違つて生まれ出てきた者のようにみえる。それにもかかわらず、間違つて生きていかねばならないとは。間違つて生まれ出てきた者に、何の幸いがあるう。

時とは持続それ自体である。そして、それは、私にとっては、耐えること以外のなにものでもない。しかし、私には、もはや、このような時の定めに耐え忍ぶことができない。

この世は悲、苦、醜に満ちている。

この世を生きて行くには、仮面をかぶらねばならない。自己を疎外するしかない。

不愉快。そして、わが生涯。

この世は不愉快なものである。

この世は戦いである。

今生は仮の世。仮の姿を取る以外にない。

世に久しきものがないのなら、驕れるときに驕れるがよい。

言つて甲斐ない世の中だから、私は、ただ、見るだけである。しかし、目を開けて見るには、現実には、あまりにも醜い。見るに忍びない。

虚飾の世。実に、虚飾の世。

礼法。自己を隠すための仮面。

この世はお芝居だという。とすれば、われわれは、その芝居の役者であると同時に見物でもあるということになる。ただ、それほどおもしろくもない芝居である。

げに、厭わしき世かな。

時代に受け入れられた者は、時代とともに消え去る。

人生は、この世というパーティに出席するようなものである。喜んでだろうか。義理でだろうか。

人生には、知らなかったゆえの悔恨があり、知っているがゆえの苦悩がある。

盆中を這い回っている虫のように、人生は、結局、同じ所を巡っている。

人生、百に満たざるに、常に千載の憂いを懐く。

道に迷うことなくして、道を覚えることはない。

愁い多ければ、かならず、人を損ず。愁い遣り難し。

愁わざること、飛蓬に似たり。

かつて学舎にあったとき、私は孤高であった。そこを去ってから、四十年が過ぎた。

学舎を去って以来、わが身ひとつはもとの身のままである。

## 死について

死は現前している。生あるものは、また、刻々と死している。瞬間、瞬間における生と死の結合によって、生命体は形成され、変化していく。

死は苦の解決であり、救いである。しかし、それに至るまでには、苦しみを経なければならぬ。

睡眠への願望、それは死、永遠の眠りへの願望である。

生きているとは常に死につつあることである。創造的破壊、それが、生きているということである。

生あるものはすべて不死を求めぬ。

死の世界は静寂である。永遠の静寂。

古代ギリシアでも、西洋中世でも、人生の無常と死を見ていた。

死は、唯一の人生の脱出口である。脱出口のないトンネルこそ、地獄である。

眠りは死に近く、死は眠りに近い。

死は、永遠の熟睡である。

私は、ただ、冥府の平安を望む。

この人生というジャングルから解放されたときにのみ、心の憂いは癒されるであろう。

この世で一番の幸福は生まれなかったこと。

生は、死よりも、運命的である。

生は悲しむべきものであり、死は喜ぶべきものである。

私には、日ごと、死を思わぬ日はない。

この今生に存在したこと、それが、もともと間違いであった。

いつになったら、わが心は平安になるのであろうか。

重い荷物は、なるべく早めに降ろすが良い。

永遠の孤独。死。

われ、若きときより、わが死を思えり。

死すること帰するが如し。

生きることは、死することより辛い。

死のみが平安であり、静かである。そこには、憤りも、恥もない。

しばし待て、死機来たるまで。

意味ある死は幸いなり。意味なき死は禍いなり。されど、意味なき死を是とせよ。

冥府の神々が私をいざなう。

われわれの人生は、死という同じひとつの出口だけがある数多くの迷路である。

この世の舞い納めをすべきである。たとえ、馬鹿げた踊りでも。

どんなに下手な芝居でも、幕は下ろさねばならない。どんなに下手な文章でも、終止譜は打たねばならない。

生き物に静かな夜の休息が必要なように、人生にも静かな休息が必要である。

死すべきものは、死なねば、救われぬ。

命あるものに死があるのは幸いである。

人は、生まれながらにして、死を前にしている。

恨み、それは、飲んで死ぬものである。

死の世界、それは、絶対の静寂の世界である。生、それは、この静かな海にしばし現われ

た泡のようなものにすぎない。

海の底は静かである。

（死）は（生）以上に実在的である。

心病めるときは、眠りにつくべし。

私は、死を望んでいるのではない。私の望んでいることは、存在しなかったことである。

傷つきやすき精神は、私に、死を求めている。

初冬、寒風の吹き荒ぶころになると、いつも、黄泉の国の神々と死者達が私を誘いにやってくる。

死せる神々への信仰。

人は、みな、人生という牢獄に閉じ込められている無期懲役囚である。この無期懲役囚は、死において、はじめて、赦免される。

滅びの世界は静かである。それは、死の世界がそうであるのと同じである。

わが魂、病みたり。しかし、退休して、草木とともに朽ち果てんには。

耐え難き苦痛を忍ぶより、静寂な世界に帰った方がよい。

死は解放である。この世の苦、重荷、すべてのものからの解放である。この世の人生が苦でないことがあるか。この世の人生が重荷でないことがあるか。

死はよろこばしいものである。生きることは苦だから、苦からの解放ほどよろこばしいものはない。

死、それは、この世の煩悶からすべてを解放してくれる。この世の煩悶ほど、人を苦しめるものはない。

人生はひとつの芝居である。少なくとも生きるかぎりには、下手にせよ、芝居をしていかねばならない。もしも、芝居に飽きたら、そのときは、いつでもよい、幕を下ろすがよい。

恩愛を忘れ、もっと早くに世を去るべきであった。何の因果でかなくなりしか。

今まで書いてきたもの、それは、すべて、私にとって遺稿にすぎぬ。

私は、前世にも、今生にも、来世にも、存在したくはなかった。

いかに耐え難きものでも、一切を解決してくれるもの、それが死である。死だけが、すべてを解決してくれる。

死のみが、醜悪なものから解放してくれる。

死の世界は、苦も楽もない絶対の静寂の世界であり、至福の世界である。もし、そうでなかったなら、苦痛という代償を払ってまでして死んでいかねばならないことが理解できな

いではないか。あまりにも、収支が合わなさすぎる。

私にとって、死よりもっと恐ろしく呪わしいものは、生である。生ほど災いなものはない。生に比べれば、死は、かえって美しく、静かであり、至福でさえある。

現代、この持続なき世界にあって、純粹持続は、わずかに、死の世界に自らの隠れ家を見つけたかようである。

現代、生き長らえるに甲斐ない時代。

死、それは、ともかく、ひとつの救いである。

もしも生が永遠であったなら、人は耐えきれなかったであろう。永遠な生ほど退屈なものはない。死あつて、ようやく生は生でありうる。永遠な生ほど退屈なもの

まるで、この散乱の世界から逃避してようやく安息を得たかのように、死者は、死の世界にやつてくる。現代の喧騒から最も遠くにあるもの、それが、死の世界である。

しかし、最も幸福なことは、もともとこの世に生まれなかったことである。

人生は罪多きものである。その罪は、どこかで浄化されねばならぬ。死において。

死、それは、ともかくも、ひとつの救いである。もしかしたら、もっとも完璧な救いであるかもしれぬ。

アトポーシス。細胞は自ら死して、新しい細胞に席を譲る。われわれの個体も同様である。とすれば、死とは望ましいものだと言わねばならない。

何事も死ななければ解決しない。

死してはじめて、休むを得る。

## 空の空

空の空なるかな。一切は空である。

すべては空しい。

いかなる存在も空である。一切の存在は空無である。

私にとって、この世の事象は、すべて空象にすぎない。

この世のことは空しい。だが、この世ならざることも、同じように空しい。

一切空。真理においても。非真理においても。

ああ、なんと空しいことか。すべては空しい。すべては空しい。実に、すべてが空しい。

何を語っても空しい。何を行なっても空しい。

この世のことは空無である。何も残らない。

およそ人の為せることで、空しくないものはない。

人の営む文明、これも、何と空しいことであろう。

思想、これほど空しいものはない。

この世のことは、すべて景色にすぎない。しかも、それは、すべてフィクションにすぎない。

歴史のうちにあるものは、すべて空しい。どうして、空無ならざるものがあろうか。

富める者も、貧しき者も、等しき者も、等しからざる者も、人みな空に帰す。

ああ、何とすべてのものが空しいことか。私の目にし耳にするもので、空しくないものはない。

今をときめく者、これも長く続くことはない。すべては消えていく。後の世に残るもの、これも、さらに後の世に残ることはない。永遠に続くものはない。一切は空である。

一切は空しい。限りなく空しい。地上のものも、地上になきものも。天上のものも、天上になきものも。

贖うこともできぬ。すべては遅すぎる。ああ、これも、また、空である。

人は生まれ、そして死ぬ。その生死の束の間の所業に何の益があろう。人生、定めて益なし。

過ぎし時に思いを馳せ、来るべき時に志を立て、現在の我身を律する。これも、また、空である。

歴史は一切を空しくする。かつての偉大なものも、現在の高貴なものも、将来のそれらも。これも、空である。

昏みたる者との戦いは必ず敗北する。これも、また、空である。

何を憂うことがあろうか。一切は空無なれば。何を嘆くことがあろうか。一切は空無なれば。何を悔いることがあろうか。一切は空無なれば。

もう言うまい、語るまいと思つてから、何度言い、語つてきたことか。これも、また、空である。

古今東西の夥しい文書、それに、ほんの一葉を付け加えてみたところで、一体何になろう。無益。一切は、なお、空しい。

崩壊の時代に逆らう者は、ただ、己が身を滅ぼすのみ。この空しき時代に己が生きる世界はない。何も見ぬがよい。何も聞かぬがよい。何も語らぬがよい。

何をやっても空しい。価値なきものが価値あることくもてはやされる時代なのだから。いとすみやかに消え去るもののみ。

私にとって、過去も、現在も、将来も、すでに忘却の彼方に消え去ってしまっている。

歴史上現われた多くの思想家、それも、ほんの数行の要約ですんでしまう。これも、なお、空しい。

後の世に記憶されるものも、さらに、後の世に記憶されることはなく、空である。

昏みたる世は、われに苦痛のみをもたらす。これも、また、空にして、無益である。

かくも頹落した時代に、苦痛を凌いでも、何の償いもない。何の益があろう。一切は、空なり。

われ、若きときより、人の世の空しさを知れり。

人間の生み出すもの、作り出すものは、本来、虚妄である。

何ごとも、その実体は空である。それは、はなばなしい芸人が人々の幻想の集積に過ぎないのと同じである。

実に、現われたかと思うと消え、消えたかと思うと現われる、この空無な世界。消えるためにのみ現われる、この空無な世界。

虚名、定めて、益なし。

私にとっては、現在も、未来も、過ぎ去った過去に等しい。

夥しい出版物の洪水。すべては、図書館に死蔵されていく。否、死蔵されさえせずに消えていく。これも空である。

偉大なものも、卑小なものも、同じように忘れ去られていき、永遠に記憶されることはない。

歴史の様々の事象は、風に追われる塵のように空しい。

高貴な精神の叫びも、大衆のざわめきの中に掻き消されていく。言って、何になろう。語って、何になろう。これも、風を捕えるように空しい。

高貴な精神は、低劣なものに包囲されて敗北する。これも、空である。

病める魂は、その苦難と忍従に満ちた長い沈黙の間を破って、ただ一言叫ぶ。「空」とのみ。

## 大地

あらゆるものが生まれ、そして死ぬ場所、永遠なる大地。永遠なる大地は永遠に静かである。歴史も、そこへと消えていく。

あらゆるものの死の場はあらゆるものの生の場であり、あらゆるものの生の場はあらゆるものの死の場である。生と死は、永遠な大地の静寂のもとでひとつである。

大地は非情である。大地は、恵みも災厄も与える。幸も不幸も与える。幸運も不運も与える。人間は、この中で翻弄される。大地を畏れよ。

大地は、未来の以後であり、過去の以前であり、現在の足下である。

ボロブドゥール遺跡を上から下へ見ていくと、空即是色の思想が現われる。空はまざまざと現われ、色として顕現する。最後には、われわれ凡夫が迷う煩惱生死の欲界となる。しかし、それも、また、大地に帰っていく。

大地は、ときとして大音声を発して怒るときがある。大地の瞋恚は実在する。

大地の根源からほとぼりする詩のように思惟も生まれ、そこへと帰っていく。

大地は善きものも悪しきものも生みだす。

大地は沈黙せり。人の声だに喧しのみ。

大地の沈黙と静けさ。

永遠なる大地。その沈黙。歴史はそこから始まり、そこへと帰る。

現代文明は、その罪ゆえに滅ばねばならない。そして、大地へ。そこに、カタルシスがあり、救いがある。

現代という怪物の死。そこに広がる大地。永遠のやすらぎ。

私は、歴史の終末の大地の静寂に身を埋める。

歴史の原初に帰るのではない。歴史の終末の沈黙する大地へ帰るのである。

永遠なる大地は永遠に沈黙する。

時代悪しく、ここに斃れし者あり。大地の恵みあれ。

宇宙から地球、生命に至る方向性をもった目的内在性を把握しなければならない。しかも、内部観測的に。

外的な時間・空間の座標軸を設定して、そこに物体でも生物でも人間でも位置づけ、それを外部観測的に因果律で説明してしまおうとするのが近代科学のやり方。ダーウィンの進化論は、確かに、そこに「進化」という新しい概念を導入したが、それを摘者生存と自然選択で説明しようとするところに、まだ、この近代科学の弊害が入っている。

相成相互作用からの自己形成、共鳴ということを考えれば、突如とした生成、飛躍も理解できる。

生物の果たす地球造形上の大きな役割の延長上に、人間の芸術や技術の営みもある。

少なくとも近代以前の文明は、宗教を核として、そのまわりに、哲学、芸術、科学、経済（商業や農業）、技術、そして自然、それらが同心円的に体系づけられた全体である。しかも、その体系と体系が相互作用して、文明は飛躍していく。

イエスばかりではない、誰もが、十字架をかかえて生きている。

社交は、どんな社交でも、虚偽が含まれる。

屈辱を屈辱とも思わぬ民。それどころか、父祖を貶めて、それを喜ぶ民。このような亡国の民を擁する国は滅ぶべきである。

私は常に敗北してきた。

死はすべてを空しくする。

他者理解は自己理解である。

カオスと無限大を恐れるな。これを避けると、理論は単純化するが、現象をつかめなくなる。

このような時代に、天地は沈黙し、黙して語らない。

引用とは、我が田に水を引くこと。

人生、恥多し。

理解とは願望である。人は、そうあつて欲しいと思うことしか理解しない。

敗北。私は、戦後という得体の知れない敵艦に向かって、自らの死を賭して突撃していった特攻隊のようなものだった。敗北。望むらくは、それが高貴なる敗北であるなら。

人生は、どんなに長い人生でも、死を待ちながら生きていくことに変わりはない。病院で死を待つ末期癌患者のように。

芸術は、宗教性と儀礼、神秘性と超越性から生み出されてくる。しかも、社会の局外から。

時間は生成の表現であり、空間は生成の断面である。

人生、悔い多し。

死の世界は絶対の無である。永遠の静けさの世界である。一切の煩惱の消え失せるところ、それが死の世界である。ニルヴァーナ。涅槃寂静。

死は何ものでもない。死の不安、死の恐怖、死の悲惨、死への願望、それらは死の世界にはない。それらはすべて生である。臨死体験も。

あの世には、仏もいなければ、衆生もない。極楽もなければ、地獄もない。なんにもな

い。仏も衆生も、極楽も地獄も、この世の煩惱の生み出すものである。

空即是色、これは真実である。しかし、これはまた、忽然念起の無明であり、煩惱の出現である。

わが子を思え。自分で作っておきながら、思うようにも育たず、時に反抗する。それと同じく、神もまた、人間を創造しておきながら、思うようにならず、時に反逆する。これが、人間的自由というものか。

ああ、霊媒の流行、霊媒ばかり。わが思想界。

過去の東西の思想を探究するのではない。事柄そのものを探究しなければならない。

真理を前にして、人は孤独である。